高槻市文化財調査概要XVI

嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・15

1991

高槻市教育委員会

はしがき

大阪と京都の中間に位置する高槻市は、弥生時代から連綿と続く大規模な集落遺跡が数多く点在し、丘陵部には古墳時代前期の弁天山古墳群や後期の塚原古墳群・塚脇古墳群・安満山古墳群など近畿地方を代表する古墳群が形成されるなど、交通の要衝としてはやくから三島地方の中心地であったことがうかがえます。しかしこれら貴重な遺跡の多くは、近年の大規模な宅地開発などによって消滅しているのが現状であります。その際の発掘調査により得られた資料等は三島地方の地域史を解明するのに非常に大きい役割を果すものと考えております。

今年度の嶋上郡衙跡周辺部における調査では、個人住宅の建て替えに伴う小規模なもののほか、農道・下水道の整備工事にともなう大規模な調査も数多くおこなわれました。とくに神郡社の南側に位置する水路の調査では、大きな柱根をもつ回廊と考えられる建物跡や瓦溜など芥川廃寺の遺構がはじめて発見されました。白鳳時代に創建されたとされる芥川廃寺は、塔心礎の発見や付近から出土する瓦などからその存在がはやくから知られていましたが、寺院に直接関連する遺構を検出したことは芥川廃寺並びに嶋上郡衙の在り方を考えるうえでも重要な発見といえます。そのほか郡衙北東部の調査では、弥生時代から中世まで続く厚い包含層や井戸を検出した結果、郡衙の北辺地域が式内社・阿久刀神社を中心に形成・展開されていたことがあらためて確認され、意義深いものとなりました。

また、塚脇古墳群では新しく発見された円墳の横穴式石室が調査され、石室内から鉄地金銅製の豪華な馬具類が多数出土しました。石室の規模、副葬品の種類などから、塚脇古墳群のなかでも首長クラスの墓で、この古墳群が形成される初期の段階に造られたことが考えられ、三島地方の古墳群成立過程を考えるうえで貴重な調査でありました。

ここに今年度実施した調査成果をまとめ、多くの方々のご教示を仰ぐとともに、調査にご協力いただいた関係各位に心から感謝いたします。

平成3年3月30日

高槻市教育委員会
社会教育課長　鳥　越　仁　道

例　　言

1．本書は、高槻市教育委員会が平成２年度国庫補助事業（総額5,000,000円）として計画、実施した高槻市所在の史跡・嶋上郡衙跡周辺部および郡衙関連遺跡の発掘調査事業の概要報告書である。

2．事業は、高槻市教育委員会の直営事業として実施し、大阪府教育委員会の助力を得て、平成２年４月23日に着手、平成３年３月30日に終了した。

3．調査は、高槻市立埋蔵文化財調査センターがおなこった。組織及び調査担当者は以下のとおりである。

所　　長	冨成哲也
次　　長	大船孝弘
事務吏員	佐々木　清
技術吏員	橋本久和・森田克行・鐘ヶ江一朗
	宮崎康雄・高橋公一
文化財専門員	中村公一・北原　治・武村雅一

4．本書の執筆は各調査担当者がおこない、分担は文末に記した。出土遺物の写真撮影は中村公一、同実測・製図は各担当者がおこなった。遺物整理については以下の各氏の援助をうけた。厚く感謝する。

清田　悦子・楠瀬　久恵・後藤　勇子・佐藤喜久子・白銀　良子・辻　美紀・長尾　雅子・林　由香子・原島　俊子・藤原　敏子・清水　良真

5．調査の実施にあたり、以下に掲げる土地所有者の方々をはじめ、関係機関各位のご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表します。

羽瀬直治、下村喜久治、阪上　猛、服部健史、福田良一、西塚真治、進隆雄、梶　利安、岡　久夫、藤村　勉、朝井俊司、清川研二、前田研三、尾通正博、有川治子、竿田博行、岡根陽二郎、土田光恵、藤田信弘、橋本理則、山川義一、鉄村壽龍、山口孝治、今西すゑ子、枦山タネ、石田晶史、吉田秀男、吉田アサエ、長谷川貞治

目　　次

Ⅰ　嶋上郡衙跡 …… 1

Ⅱ　前塚古墳 …… 20

Ⅲ　郡家今城遺跡 …… 27

Ⅳ　郡家本町遺跡 …… 32

Ⅴ　津之江南遺跡 …… 33

Ⅵ　塚脇古墳群 …… 33

Ⅶ　大蔵司遺跡 …… 37

Ⅷ　芥川遺跡 …… 38

Ⅸ　安満遺跡 …… 39

Ⅹ　梶原寺跡 …… 40

Ⅺ　まとめ …… 41

Ⅻ　芥川廃寺出土の瓦について（報告と若干の予察） …… 44

No	遺跡名（地区）	調査地	面積（㎡）	申請者
1	嶋上郡衙跡（4－H）	大字郡家945	38.22	羽瀬直治
2	〃（4－L）	郡家本町747	208	下村喜久治
3	〃（4－O・P）	〃 939	34.56	下村喜久治
4	〃（7－O）	清福寺町729－1,806－6・7	297	阪上猛
5	〃（35－A·E·I·M）	郡家新町269他（水路·現状変更）	210	高槻市長
6	〃（38－H）	清福寺町919－27	51.75	服部健史
7	〃（38－H）	〃 919－23	54.34	福田良一
8	〃（38－K・L）	〃 919－16	40.76	西塚真治
9	〃（43－N・O）	郡家新町395－43	71.26	進隆雄
10	〃（48－B・C）	川西町一丁目956－11	53.27	梶利安
11	〃（48－I）	〃 953－18	57.62	岡久夫
12	〃（54－I・M）	郡家新町350－5・6	231.85	藤村勉
13	〃（57－L）	川西町一丁目1092－9	54.55	朝井俊司
14	〃（67－K）	〃 1087－27	68.25	清川研二
15	〃（67－K）	〃 1087－28	66.32	前田研三
16	〃（74－C）	郡家新町156－6	74.95	尾通正博
17	前塚古墳	岡本町33－2,94－1	816.385	有川治子
18	郡家今城遺跡（90－1）	氷室町一丁目781－46	115.92	竿田博行
19	〃（90－2）	〃 781－32	104.65	岡根陽二郎
20	〃（90－3）	郡家新町141－1	146.67	土田光恵
21	〃（90－4）	〃 148－2	100	藤田信弘
22	郡家本町遺跡	郡家本町1563－6	106.642	橋本理則
23	津之江南遺跡	津之江北町267－3	390	山川義一
24	塚脇古墳群（F－1号墳）	塚脇一丁目294	231	鉄村壽龍
25	大蔵司遺跡	大蔵司三丁目209	475.59	山口孝治
26	芥川遺跡	殿町68－2	219.75	今西すゑ子
27	安満遺跡（90－1）	安満東の町427－6・8・9	98.229	枦山タネ
28	〃（90－2）	〃 乙428	264	石田晶史 吉田秀男 吉田アサエ
29	梶原寺跡	梶原一丁目382－1	443.684	長谷川貞治

平成２年度　嶋上郡衙跡他関連遺跡調査地一覧

Ⅰ．嶋上郡衙跡

１．嶋上郡衙跡（４－Ｈ地区）の調査

高槻市大字郡家945番地にあたり、小字名は東垣内と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北側中央部に位置し、南平台丘陵から東方向に延びてきた段丘面の平担面にあたる。またすぐ北側に位置する郡家本町遺跡の南辺と接しており、縄文時代から歴史時代にかけての集落群が濃密に分布していることが予測される地域である。調査は届出地がすでに厚い盛土がおこなわれていることから、中央部に２ｍ角のトレンチを設け、層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.3ｍ）・暗褐色土層（ 0.5ｍ）〔遺物包含層〕・暗黄土色土層〔地山〕である。今回の調査区は狭小なこともあって、遺構はまったく検出することができなかった。出土遺物は暗褐色土層から弥生時代に属する土器片が数点出土したが、器形及び時期等については明確にできなかった。

（大船）

２．嶋上郡衙跡（４－Ｌ地区）の調査

調査地は高槻市郡家本町747番地にあたり、小字名は東垣内と称する。遺跡北辺を限る丘陵の直下にあって、式内社阿久刀神社の西約180ｍに位置する。現状は畑地である。農機具小屋新設が計画されたため、発掘調査を実施した。

調査は、小型重機で表土を除去し、人力で遺構精査を行なった。基本的層序は、耕土（0.15ｍ）・暗灰色土～黄褐色砂礫〔整地土〕（0.2～0.3ｍ）・黒褐色礫土～黒褐色砂礫（ 0.3～0.45ｍ）・青灰色砂礫〔地山〕である。地山面の標高は約18.7ｍをはかる。

遺構としては、東西 0.8ｍ、南北0.65ｍ、深さ 0.3ｍを測る方形のピット１個を検出したにとどまる。埋土は暗褐色礫土で、埋土中から少量の土師器片が出土したものの、時期不明である。

地山面では湧水が激しく、層序からみて当該地は小規模な埋没谷であると考えられる。

（鐘ヶ江）

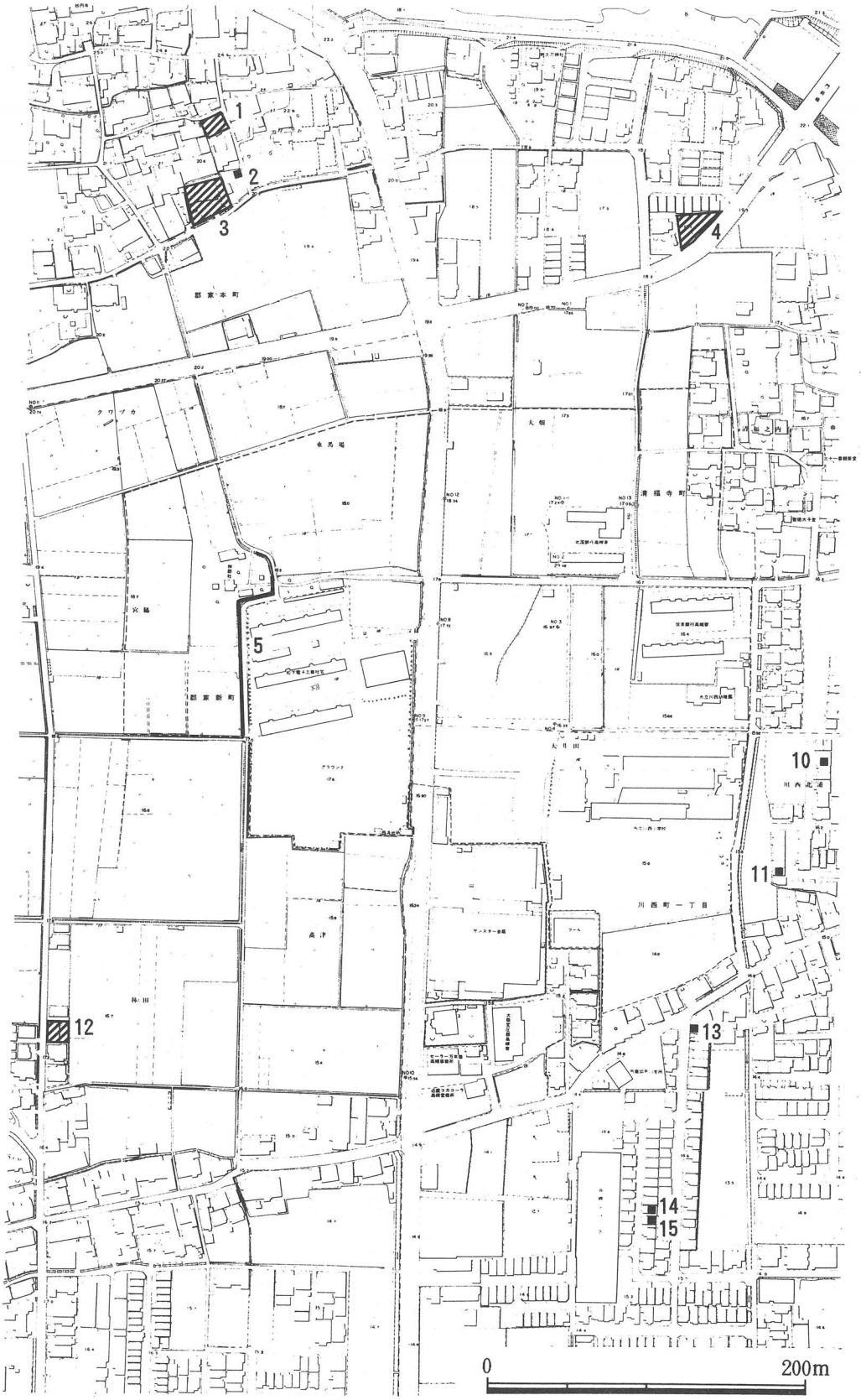


図１．嶋上郡衙跡の調査位置図(1)

3．嶋上郡衙跡（4－O・P地区）の調査

高槻市郡家本町939番地にあたり、小字名は東垣内と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北側中央部に位置し、これまで周囲の調査結果などから弥生時代から歴史時代の集落群が広がっていることが確認されている地域である。調査は届出地がすでに宅地化されていることから、中央部に2m角のトレンチを設け人力で層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.5m）・耕土（0.2m）・床土（0.2m）・暗褐色土層（0.3m）〔遺物包含層〕・黄褐色～青灰色礫土層〔地山〕である。今回の調査区は狭小なこともあり、水田下に新しい木組の暗渠を認めた以外に遺構はまったく検出することができなかった。また遺物は暗褐色土層から古墳時代から歴史時代にかけての須恵器・土師器片が数点出土しただけである。

（大船）

4．嶋上郡衙跡（7－O地区）の調査

高槻市清福寺町807－6番地他にあたり、小字名は清福ノ内である。現状は畑地である。

今回の調査地は、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡や中世の遺構が多数検出された17－F・G・T地区（「17－F・G・T地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・10』1986）の北隣にあたっている。調査は遺構が密に検出されるものと予想されたため、調査区を東西に分割し、重機で排土を反転して行なった。基本的な層序は耕土（0.1m）・床土（0.2m）・暗褐色土（0.1m）〔上層包含層：平安時代〕・暗褐色粘質土（0.3m）〔包含層〕・黒褐色土（0.2m）〔包含層〕・暗褐色礫土〔地山〕である。地山面は北西端で標高16.1mを測る。

遺　構（図版第2・3，図2～4）

検出した遺構は井戸2基、土坑1基、落ち込み1ケ所と柱穴などである。

井戸1・2は調査区の北西部で検出した。2つの井戸は重複しており、井戸2が井戸1より先行して作られている。

井戸1は方形の木組井戸である。井戸枠の内法は一辺0.85m、現存の深さ1.07mを測る。井戸枠は掘形の四隅に角柱を立て、横桟を柱の枘穴に取りつけ、縦方向の板材を外側から横桟に立てかける。この縦板は幅が12cm前後と狭いために、継ぎ目をふさ

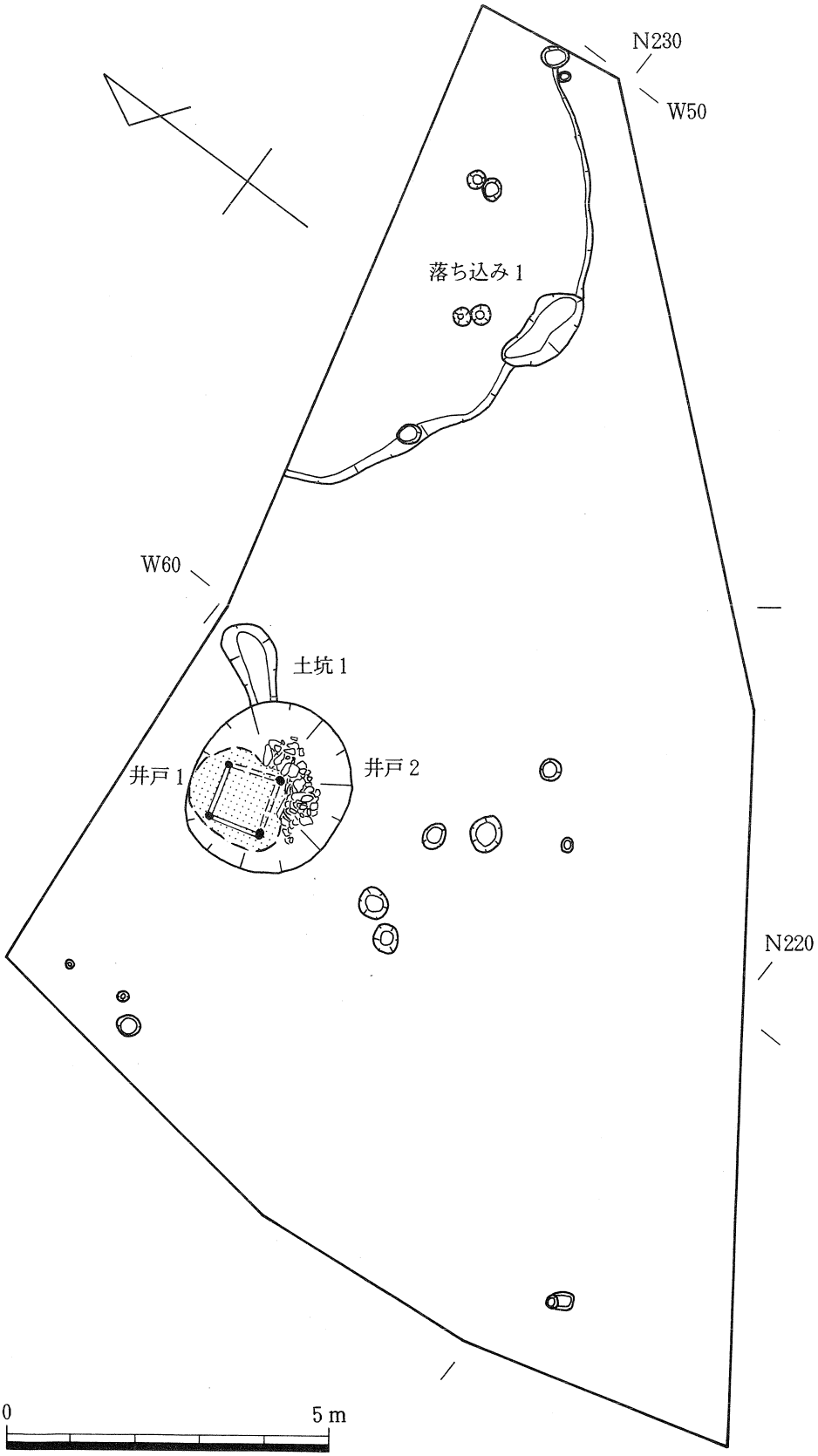


図 2．7－O地区　平面図

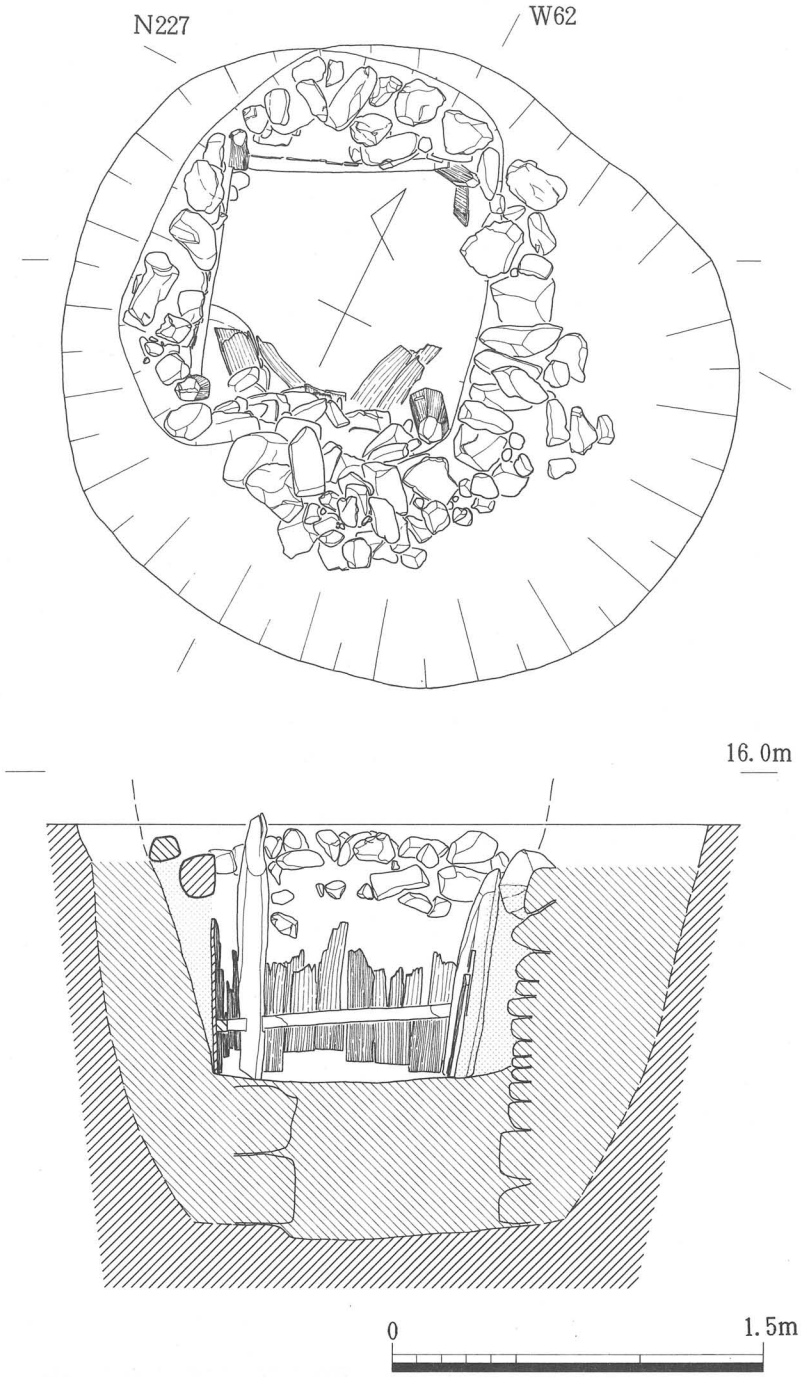


図３．７－Ｏ地区　井戸１平面図・断面図

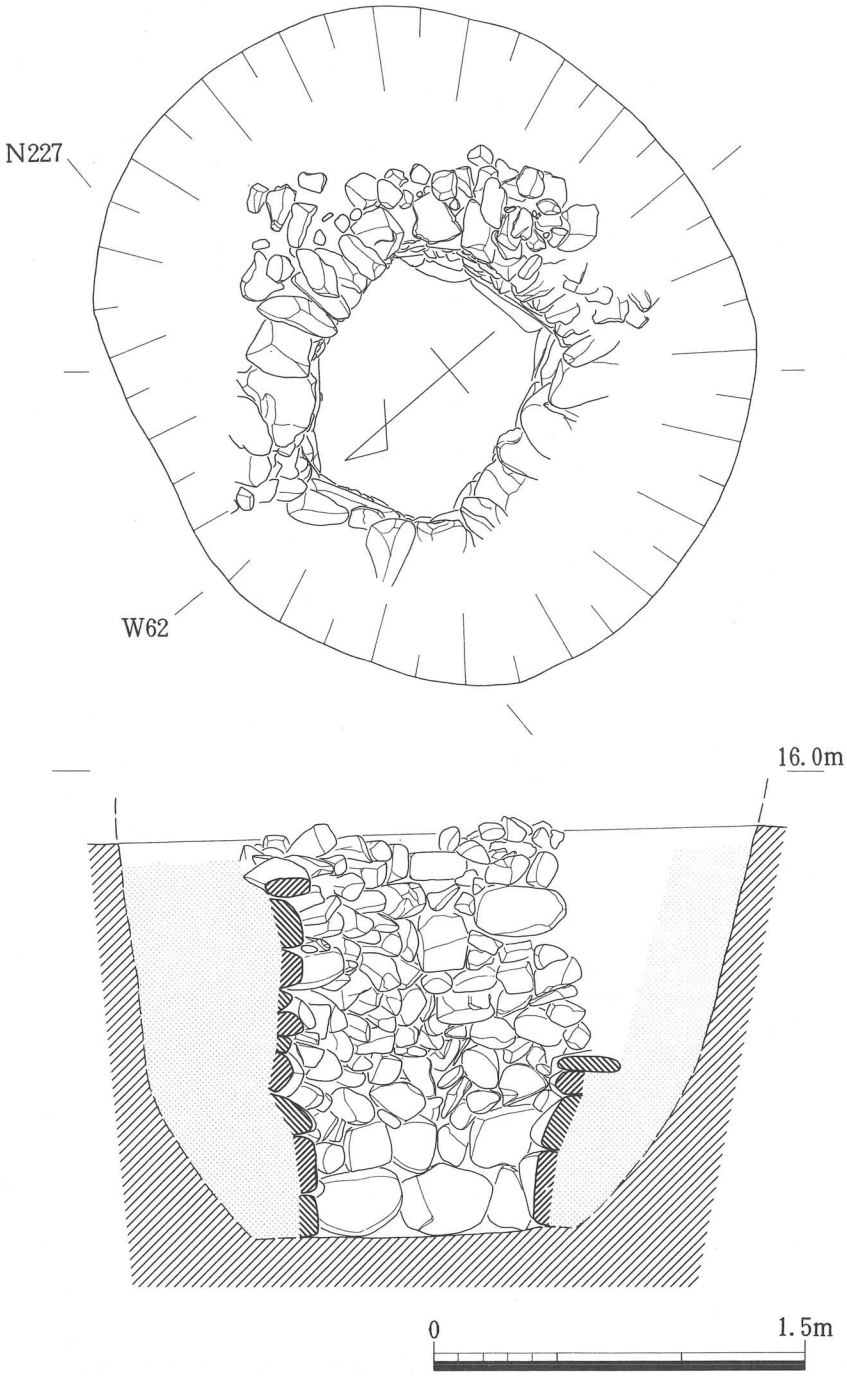


図４．７－Ｏ地区　井戸２平面図・断面図

ぐよう二重に立てられている。現状では、横桟は北側と西側の最下段を除き失われており、南側と東側の縦板が井戸内に倒れていた。埋土は上層の暗灰色礫土と廃棄後自然埋没時に堆積した下層の暗青灰色粘質土に分けられる。遺物は下層と井戸底より土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器・木器が出土している。時期は井戸底の遺物から判断して11世紀初頭から前半頃とかんがえられる。

井戸２は上端部径約１ｍ、底部径0.85ｍ、現存の深さ1.6ｍを測る円形石組井戸で、長径2.8ｍ、短径2.5ｍの楕円形の掘形をもつ。石組は比較的大形の河原石を底部に横積みし、その上に人頭大の河原石を小口積みしている。北西部の石組は底から約0.7ｍのところより崩壊しており、埋土も落下した石材や掘形の埋土を含む淡青灰色粘土である。遺物は井戸底より墨書土器を含む少量の土師器・黒色土器片が出土している。時期は10世紀後半頃とかんがえられる。

土坑1は調査区の北西部で検出した。幅0.7ｍ、長さ1.4ｍ、深さ0.2ｍを測り、西側は井戸２に切られている。出土遺物は土師器・須恵器の細片のみである。時期は不明である。

落ち込み１は調査区東端で検出した。東西3.9ｍ、深さ0.15ｍを測り、北側はさらに調査区外に続いている。埋土は暗灰褐色粘質土で縄文土器・弥生土器が出土した。時期は弥生時代後期とかんがえられる。

遺　物(図版第４～７,図５～７)

本調査区では遺構の密度が薄い反面、弥生時代から古墳時代にかけての包含層が厚く堆積していた。遺物は弥生時代から古墳時代と平安時代の２時期に大きく分れる。

井戸１からは土師器（１～５・19・27～29）・黒色土器（６～18・30～35）・須恵器（36～40）・緑釉陶器（41～44）・延喜通宝（46）が出土している。

１～４・28は口径約10.5㎝をはかり、平坦な底部から口縁が大きく外反する土師器の皿である。５・27は口径約14㎝をはかる同形態の杯である。29は高い高台を有する杯である。19は短い鍔を付ける土釜である。口径25.5㎝をはかり、黒褐色の粗い胎土をもつ。

６～15・30～35は口径約14㎝、器高約６㎝をはかる黒色土器Ａ類椀である。６～15・30・31は外面にヘラケズリを施した後、３～５分割の粗いヘラミガキをおこなう。内面は丁寧なヘラミガキをおこなう。７～12・15・30は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部が短く外反する器形である。10は完形品であり底部外面に×の箆記号をもつ。

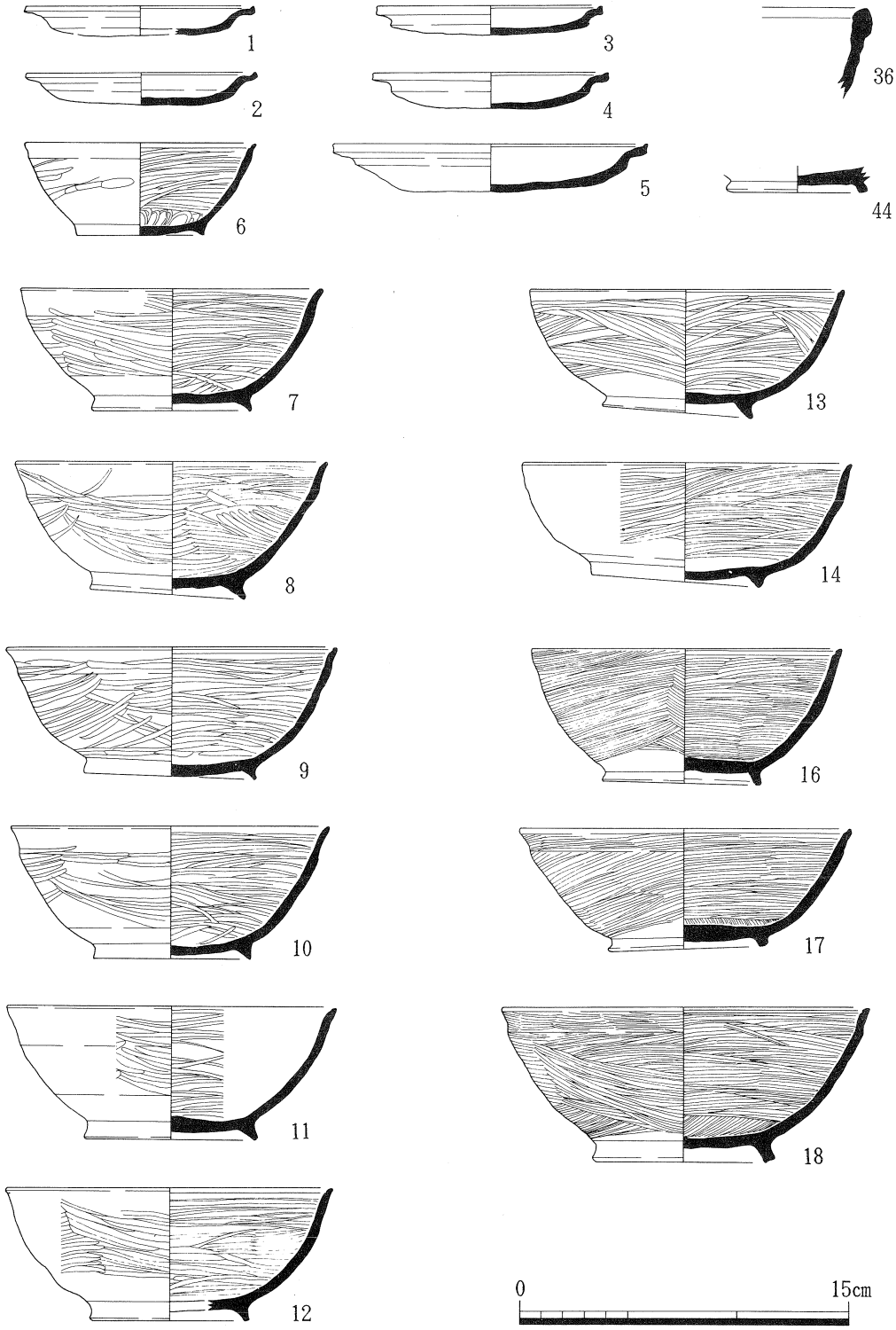


図5．7－O地区　井戸1（1～14・16～18・36・44）

13・14は体部が大きく内湾して立ち上がる。6・31は体部が内湾して直線的に立ち上がる口径約11cmの小椀である。32は二重高台を有する椀の底部であり、仏具の六器の模倣とみられる。

16～18は黒色土器B類椀である。平坦な底部より体部が深く立ち上がり、口縁端部には沈線をもつ。内外面に丁寧なヘラミガキをおこなう。

36・37は須恵器の鉢である。36は口縁部が玉縁状で体部が内湾気味に立ち上がる器形をもつ。亀岡市の篠窯で焼かれたものであろう。41～44は緑釉陶器の椀である。延喜通宝（46）は直径1.9cmの銅銭である。鋳上がりが悪く文字の判読が困難である。

土師器の杯・皿（1～5）・黒色土器A類（6～14）・黒色土器B類（16～18）・延喜通宝（46）は井戸底より一括して出土している。

また、井戸枠の隅柱・縦板には井戸と関係のない枘穴がみられることから、建築材を再利用した可能性が強い。8点の縦板材には⊕の刻印（26）がみられる。

井戸2からは土師器・黒色土器A類の破片が出土している。45は杯底部外面に墨書があるが、細片のため判読はできなかった。

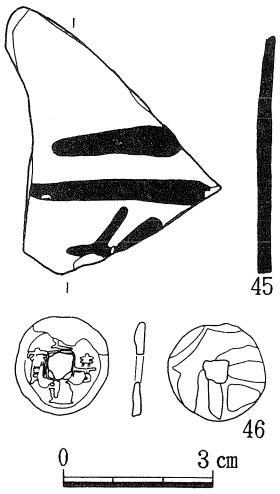


図6．7－O地区　井戸2（45）
井戸3（46）

落ち込み1からは縄文土器（47・48）・弥生時代中期の土器（49・50）・弥生時代後期の土器（51～53）が出土している。47・48は砂粒を多く含む淡褐色の胎土をもち、縦走する粗い縄文がみられる。中期の船元式であろう。49・50は広口壺の口縁部である。49は口縁端面に刻み目文をもち、色調は黄灰色である。50は口縁端面に凹線文を口縁部内面に波状文をもつ。51は肩の張った体部にタタキを施す小形の壺である。52は体部を直線文・扇状文・円形浮文で飾る鉢である。53は高杯の口縁部である。

包含層からはおもに弥生時代後期から古墳時代後期にかけての遺物が出土している。20・21・24・54・55は体部外面にタタキ目をもつ弥生時代後期の甕である。20は口縁部が大きく外反し、端部に面をもつ。21は縦長の球形の体部から外反して上方にのびる口縁部をもつ。体部外面は左下がりのタタキを施した後、腹部より下方にナデを施

す。内面は横方向のハケの後、なでている。体部のタタキにはL字を重ねた形の原体を使用している。

22・25は古墳時代前期の高杯・甕である。22は高杯の杯部である。杯部は底部より内湾して直線的に上外方にのび、口縁端部は丸くおさめる。25は細かいタタキを施す球形に近い体部をもつ。

古墳時代中期・後期の遺物としては須恵器の杯身（23・56）や高杯脚部（57）が出土している。

小　結

今回の調査で検出したおもな遺構は平安時代の井戸と少数の柱穴のみであった。井戸の埋土の堆積状況をみると、井戸2は廃棄後の自然堆積土や人為的な埋め土がなく、底のすぐ上から石組の崩落土で埋まっている。使用中に崩れたものと推測される。井戸1は崩れた土砂を取り除いて掘形としており、井戸2を改築して使用したのであろう。

また、遺物についてみると、井戸1の底より一括してほぼ完形の土師器の杯や皿・黒色土器椀・延喜通宝が出土しているところから、祭祀に関係したものであるとかんがえられる。

今回の調査地の付近はこれまでの調査から弥生時代中期から中世にかけて営まれた

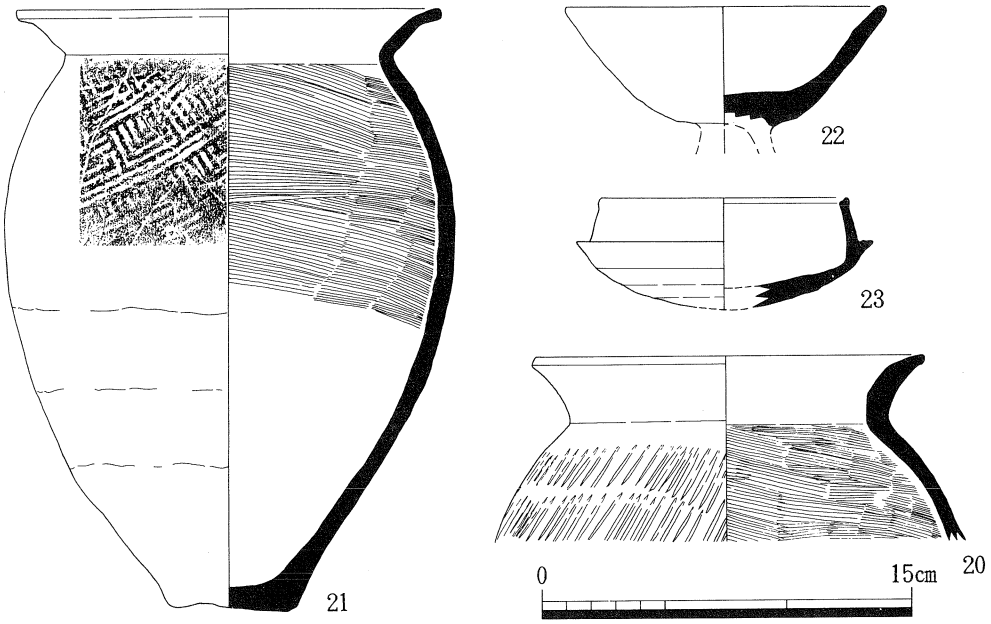


図7．7－O地区　包含層（20～23）

集落であったことが知られている。当調査区では多量の遺物を含む厚い包含層が検出されており集落の広がりを再確認することとなった。また、建物跡こそ検出しなかったものの、継続して使用された2基の井戸の存在から平安時代中期の屋敷地の一角であったとかんがえられる。（北原）

5．嶋上郡衙跡（35－A・E・I・M）地区の調査

今回の調査は、史跡・嶋上郡衙跡附寺跡の現状変更（水路改修）に伴うものである。調査地は、芥川廃寺推定地のほぼ中央に位置する「神郡社」から、まっすぐ南へのびる公有水路である。

当該水路の北側（上流）については、昭和57年に神社北側及び東側部分の改修を終了している（調査後、現状変更許可を得て実施）。そのときの知見では、寺院と関連すると考えられる建物遺構は検出されなかったものの、寺域の北と東側を一定限定する溝及び谷地形を明らかにしている。

一方、南側指定地外の地域では、昭和58年度に今回調査地南端に接続する東西水路、平成元年度に今回調査地の南側延長部分をそれぞれ調査している。その結果、土坑など若干の遺構を検出したが寺域の広がりを示す資料は得られず、したがって寺院はより北側に存在すると推定された。

これらのことから、今回はいわば調査の空白地帯にトレンチを設定することになり、寺域南限を推定するうえで重要であると考えられた。

なお、付近一帯では大正末年から昭和初年にかけて耕地整理がおこなわれており、また現状の水路と道路は、調査地東側に隣接する共同住宅及びグラウンド造成（昭和30年代）の際に付け替えられている。したがって調査地は、旧水田造成、耕地整理、水路開削の3回にわたって削平を受けていることになる。

調査対象となる水路は、神郡社に沿って鍵の手に屈曲しているため、便宜上南からA区、B区、C区として作業を進めることにした。

調査は、小型ユンボを使用して既存水路の肩及び水路の堆積土を除去したのち、人力で遺構遺物の精査をおこなった。掘削幅は上端で約2.5m、下端で約2mをはかる。

遺　構（図版第8～10・35）

［A区の遺構］

A区は、史跡境界と神郡社の間の南北水路で、延長約82mある。

基本的層序は、盛土・耕土・床土・暗茶褐色～黒褐色土層（遺物包含層）・地山である。地山面は北から緩やかに南に傾斜し、標高は北端で約17.3m、南端で約15.9mをはかる。ほぼ中央に高さ0.4mの段があり、これを境に南側が砂層ないし砂質粘土層、北側が砂礫層からなる。

遺構は、南半部では地山面で、北半部では黒褐色土層の上面及び地山面で検出した。北半部の包含層は茶褐色土層（上部）と黒褐色土層（下部）の2層に分かれ、下部包含層では弥生土器のみ検出している。なお上部包含層と南半部の暗茶褐色土包含層の連続性は、整地層のためあきらかにできなかった。

検出した遺構は溝、柱穴、瓦溜、土坑、落ち込みなどがある。

溝と土坑、落ち込みの大半は水田に伴うものとみられ、奈良～平安時代に属するのは南半部の柱穴8個、北半部のピット1個、瓦溜1基である。とくに北半部のピットと瓦溜は、黒褐色を呈する弥生期の包含層上面で検出したものであって、地山面で検出した柱穴は奈良時代以前と考えられた。

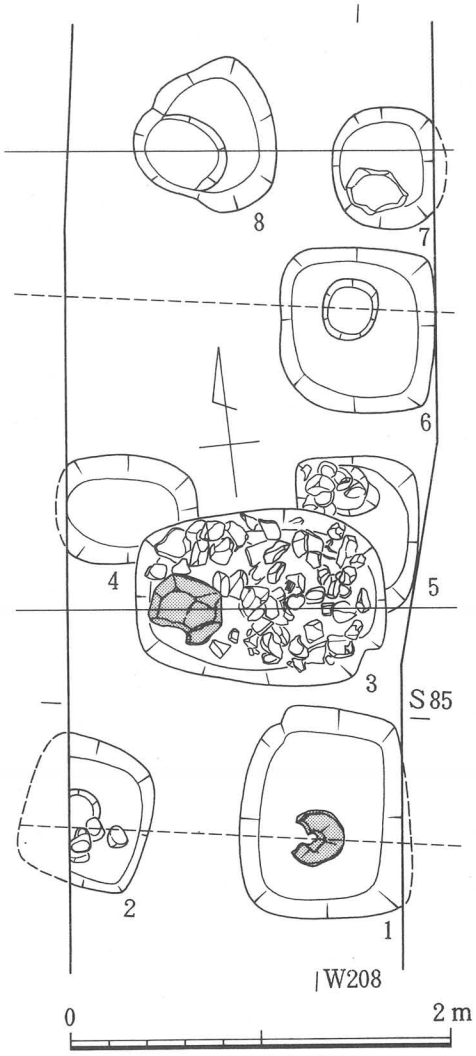


図8．柱列平面図

南半部の柱穴は、南北約4mの間にまとまって8個検出した。掘形はすべて隅丸方形を呈し、一辺0.6m程度のものから1m×1.3mの大型のものがある。深さはいずれも約0.2mと大きく削平されている。切合いのある柱穴は4と3、5と3で、4・5より3が新しいと判断された。ただし柱穴内の詰石等は極力保存を図ったため、柱穴5としたものについては、明確でない。また、このうち2個（柱穴1・3）の柱穴には、それぞれ直径32cmと40cmの柱根が遺存していた。なお柱穴3には、柱を固定するための瓦片・河原石が詰め込まれていた。

これらの柱穴は、掘形の規模、方向からみて、南北方向に並ぶ柱穴1と6、3と8

がそれぞれひとつの建物遺構として組み合う可能性が高い。その場合１と６の柱間は2.85ｍ、３と８の柱間は2.42ｍとなる。ところが、この２組の柱列は、それより南北のどちら側にも伸びていくような柱穴がないことからすると、梁間１間の東西方向の建物、たとえば回廊のような構造が想定される。

一方、この柱穴群から約40ｍ離れた北半部では、瓦溜を検出している。南北幅約1.6ｍをはかり、西側は調査区外に続く。平瓦片を主体とし、少数の軒平瓦と軒丸瓦を含む。瓦片を取り上げたところ、底面に拳～人頭大の石列を認めたが性格不明である。この瓦溜の北側では、小礫・瓦片を詰め込んだピットを検出した。径0.8ｍほどに復元でき、礎石の根石である可能性があるものの、単独の検出で性格不明である。

また土層観察の結果、東壁で瓦溜に近接して、黒褐色包含層に切り込んだ幅約0.9ｍ、深さ約 0.3ｍのピット２個を見出している。埋土は瓦溜と同様の茶褐色土であり、加えてわずかながら焼土・炭片を含んでいた。旧水路開削のため平面形はわからない。

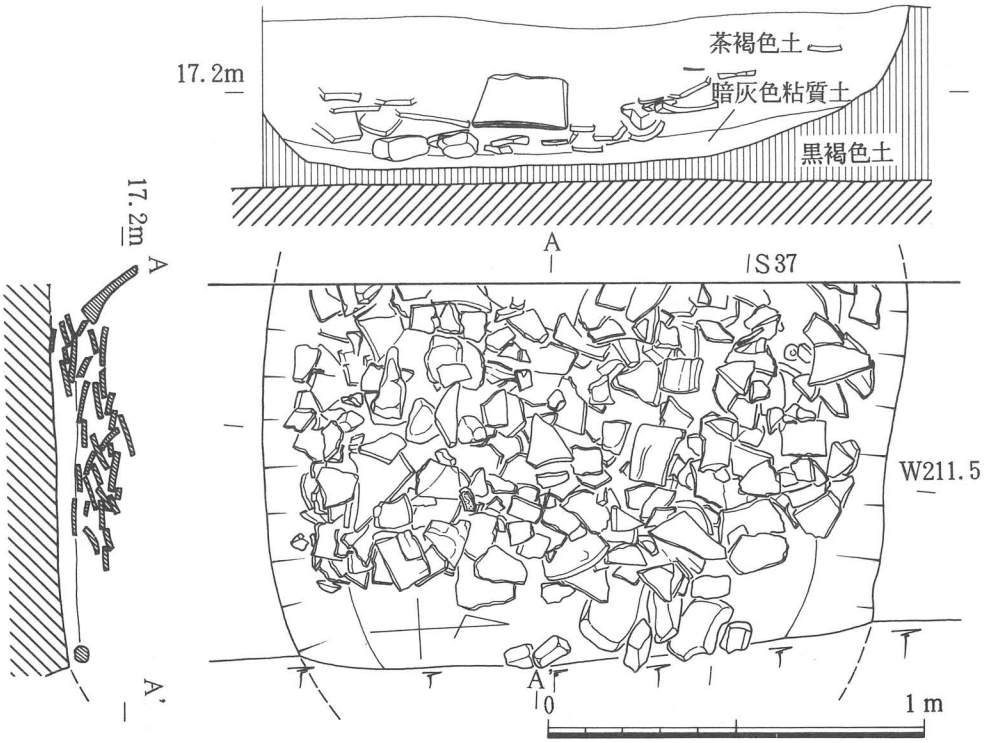


図９．瓦溜　平面図・断面図

［B・C区の遺構］

神郡社沿いの東西（B）及び南北（C）の水路である。神社側は擁壁及び石垣がつづき、調査区の幅は上端で約 1.8mと狭い。水路の砂泥等を除去するとただちに地山面に達し、また神社側は擁壁基礎による攪乱が幅約 0.6mにわたって及んでいた。したがって調査範囲のなかでは、当初の地山あるいは奈良時代遺構面は確認できないことが判明したものである。層序は、盛土・耕土・床土・黄褐色砂礫［地山］である。C区北端での地山面標高は、約17.6mをはかる。

遺　物(図版第11～18,図10)

遺物は、A区のみで検出した。整地層及び遺構から瓦類が出土しているほか、整地層出土の土馬１点がある。

土馬は、長さ26cmをはかる中空の大形品である。粘土板を丸めて胴をつくり、脚はヒゴ状の芯を差し込んで接合したらしく、脚破断面から胴中空部に貫通する小孔がみられる。鞍は粘土紐を貼りつけ、面繋・手綱・胸繋・尻繋をヘラ描き沈線であらわしている。

なお、瓦類については別稿において記述している。

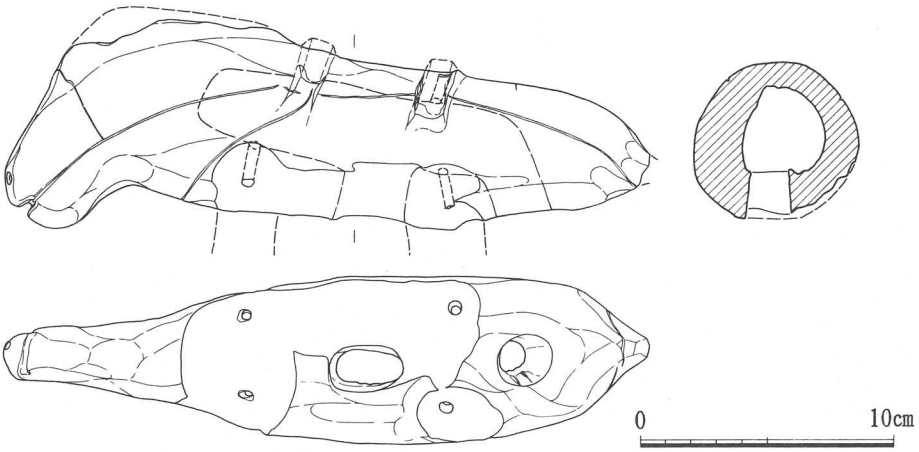


図10. 整土層出土の土馬

小　結

今回A区南半部中央で検出した柱穴群は、芥川廃寺推定地域ではじめて検出したまとまった遺構である。検出地点は、神社北部の調査成果をもとに伽藍の南端近く、中軸線の東側と考えてきた付近にあたり、柱の規模・柱間など、これが回廊である可能

性は高いと考えられる。またこの建物に建替えがみられることは、これまで塔心礎や出土瓦等の検討をもとに同寺が少なくとも１回以上建替え、補修されたと考えられてきたことと符号する。

瓦溜は神社南側約20ｍのところで検出された。すぐ西側の水田では、昭和45年の範囲確認調査の際にも大量の瓦が出土しており、神社南側に瓦が集中的に出土する地域があることは明らかである。さきの柱穴群と瓦溜は約40ｍ隔たっており、両者の間に同時期の明確な遺構がないことは、逆に付近が居住地域でないことを示唆する。出土遺物は、周辺調査では希少な瓦類が主体となっており、その点でも調査区一帯が寺域中心部であることを裏付けていると考えられよう。寺廃絶後の２度にわたる水田造成は、もっぱら削平によっておこなわれたものとみえ、包含層及び遺構の残存状況は良くない。しかし今回の調査によって掘立柱建物が検出されたことから、今後、西側水田下に伸びていると考えられる柱列を調査することによって寺の構造や中軸線を解明することが可能となった。これらは郡衙域の構成を考えるうえでの最重要課題であり、できるだけ早い時期に同地域において調査を行なう必要があると考えられる。

なお水路工事は、検出したＡ区遺構面に川砂を平均 0.2ｍ盛って遺構保存を図ったうえで施工し、またＡ区水路側壁に塗装して、柱列の位置などの遺構表示を行った。

（鐘ヶ江）

６．嶋上郡衙跡（38－Ｈ地区）の調査 (1)

高槻市清福寺町919－27番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南東部に位置し、以前の調査結果などから弥生時代中期の方形周溝墓群と土壙墓群が広がっているとされる地域である。調査は届出地がすでに宅地化されていることから、中央部南側に２ｍ角のトレンチを設け、

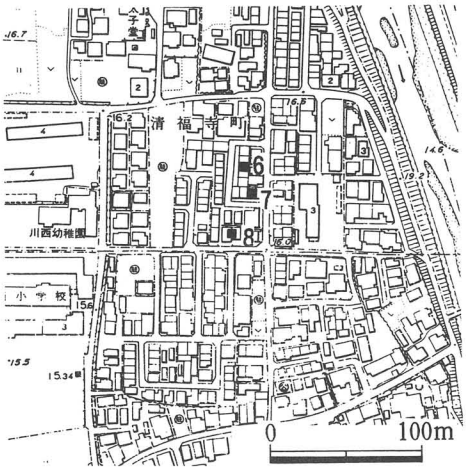


図11. 嶋上郡衙跡の調査位置図(2)

層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.5ｍ）・耕土（0.3ｍ）・床土

（0.2m）・暗灰色砂礫層（0.05m）・暗褐色土層（１m以上）〔遺物包含層〕で、確実な地山面は検出することができなかった。また調査区が狭小なこともあり、遺構・遺物は検出することができなかった。今回の断面観察から推測すると、包含層が再堆積していることは確実で、調査地が奈良時代より以前に旧芥川の河川床であったことが考えられる。（大船）

７．嶋上郡衙跡（38－Ｈ地区）の調査 (2)

調査地は高槻市清福寺町919－23番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。指定地東側の住宅地の一画で、芥川と指定地のほぼ中間に位置する。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

調査は小型重機を使用して排土し、断面観察に努めた。基本的層序は、盛土（0.35m）・暗灰色粘質土［耕土・床土］（0.15m）・暗灰緑色粘質土［整地層］（0.4m）・青灰色粗砂（0.1m）・茶灰色砂層（0.3m）・茶褐色土（0.5m）、以下茶褐色砂礫と茶褐色砂の互層となる。湧水したため、地山面には到達できなかった。

茶褐色土層、同砂礫層中から摩滅した土器片を少量検出したが、時期不明である。こうしたことから、当該地は旧河道内にあたるものと推定された。（鐘ヶ江）

８．嶋上郡衙跡（38－Ｋ・Ｌ地区）の調査

高槻市清福寺町919－16番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地であり、個人住宅の新築工事に先だって発掘調査を実施した。

今回の調査地は、嶋上郡衙跡の東縁辺部に位置し、遺構の分布が希薄な地域にあたっている。調査は届出地の中央に１m×２mのトレンチを設定し、小型ユンボで掘削をおこなった。層序は盛土（0.75m）・暗灰色粘質土（0.15m）〔耕土〕・淡青灰色粘土（0.15m）〔床土〕・淡茶灰色粘質土（0.15m）〔旧耕土〕・茶灰色粘土（0.05m）〔旧床土〕・暗灰褐色粘質土（0.15m）〔遺物包含層〕・灰褐色粘土（0.2m以上）〔遺物包含層〕である。トレンチが狭小なために明確な遺構・遺物は検出できなかった。（北原）

9．嶋上郡衙跡（43－N・O地区）の調査

高槻市郡家新町395－43番地にあたり、小字名は仮又と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西南部に位置し、遺構の分布が希薄な地域である。調査は届出地がすでに厚い盛土がおこなわれていることから、南部に東西２ｍ、南北１ｍのトレンチを設け小型ユンボを使用して層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（1.2ｍ）・耕土（0.15ｍ）・黄灰色粘土層〔地山〕である。今回の調査区は狭小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。　（大船）

図12. 嶋上郡衙跡の調査位置図(3)

10．嶋上郡衙跡（48－B・C地区）の調査

高槻市川西町１丁目956－11番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の東南部に位置し、弥生時代中期の方形周溝墓群が広がっている地域である。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることから、中央部に２ｍ角のトレンチを設け小型ユンボを使用して層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（１ｍ）・耕土（0.15ｍ）・床土（0.35ｍ）・暗褐色粘土層（0.4ｍ）〔遺物包含層〕・黄灰色土層〔地山〕である。調査区が狭小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。　（大船）

11．嶋上郡衙跡（48－I地区）の調査

調査地は、高槻市川西町一丁目953－18番地にあたり、小字名は川西北浦と称する。指定地東側に広がる住宅地南西部の一画で、昭和63年度に調査した同954－12番地のすぐ北側に位置する。

今回個人住宅の建て替えに伴い発掘届出書が提出されたが、届出面積が狭小であり、

建物基礎等は盛土内の計画であった。 近隣地の所見から当該地の遺構面は深さ約2.3mと推定されており、そのため調査は、基礎工事に立ち会って掘削が耕土下に及ばないことを確認して終了した。 （鐘ヶ江）

12. 嶋上郡衙跡（54－Ⅰ・M地区）の調査

高槻市郡家新町 350－5・6番地にあたり、小字名は林田と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡南西部に位置し、これまでの調査結果などから遺構の分布が希薄な地域にあたる。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることから、中央部に東西3m、南北5mのトレンチを設け重機を使用して層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.5m）・耕土（0.15m）・床土（0.2m）・黄褐色粘土～砂層〔地山〕である。今回の調査区は狭小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。 （大船）

13. 嶋上郡衙跡（57－L地区）の調査

調査地は高槻市川西町一丁目1092－9番地にあたり、小字名は千原樋と称する。史跡指定地の南側約30mに位置しており、北側は旧西国街道に面している。

調査は、重機で盛土を除去し、人力で精査した。層序は、盛土（0.5m）・暗灰色土（0.25m）・青灰色粘土（0.05m）・淡褐色砂礫層（0.2m）・〔整地層、一部〕・暗褐色土（0.05m）〔遺物包含層〕・灰緑色砂礫〔地山〕である。地山面は標高約13.7mをはかる。

検出した遺構は溝1条と落ち込みがある。溝は幅 0.5m、深さ 0.2mをはかり、方向は旧西国街道にほぼ近い。落ち込みは深さ 0.5mをはかり、南側は調査区外に続く。検出しえた北端部は約 0.3mをおいてほぼ溝と平行していた。両者は、断面観察によると溝が古く、落ち込みがより新しいと判断された。

遺物については、落ち込みの黒褐色土上位に土器細片を少量検出したが時期を特定できない。

これまで当該地の南方では、厚さ 0.5～0.8 mに及ぶ遺物包含層を検出した所見があり、あるいは今回検出した落ち込みが独立した遺構でなく、旧地形を反映したものである可能性もある。 （鐘ヶ江）

14. 嶋上郡衙跡（67－Ｋ地区）の調査(1)

高槻市川西町１丁目1087－27番地にあたり、小字名は千原樋と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の東南部に位置し、以前の調査結果などから弥生時代中期の住居群が広がっているとされる地域にあたる。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることから、中央部に２ｍ角のトレンチを設け小型ユンボを使用して層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（1.2ｍ）・耕土（0.1ｍ）・暗茶褐色土層（0.2ｍ）〔遺物包含層〕・黄土色粘土層〔地山〕である。今回の調査区は狭小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。（大船）

15. 嶋上郡衙跡（67－Ｋ地区）の調査(2)

調査地は高槻市川西町一丁目1087－28番地に位置し、小字は千原樋である。嶋上郡衙跡の南縁部にあたり、遺構・遺物の希薄なところである。

調査は個人住宅の建設にさきだって実施した。調査地に 2.6ｍ×２ｍのトレンチを設定し、重機で表土を除去した後に遺構検出作業をおこなった。 層序は盛土（１ｍ）・旧耕作土（0.2ｍ）・整地土（0.1ｍ）・黄灰色粘土〔地山〕である。黄灰色粘土の凹部にわずかに暗褐色粘土の堆積がみとめられるものの、明確な遺構・遺物は検出できなかった。（宮崎）

16. 嶋上郡衙跡（74－Ｇ地区）の調査

高槻市郡家新町156－６番地にあたり、小字名は東藤ヶ本と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南西部に位置し、以前の調査結果などから弥生時代中期の方形周溝墓群と古墳群が広がっている地域にあたる。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることから、南側中央部に２ｍ角のトレンチを設け、人力で層序の観

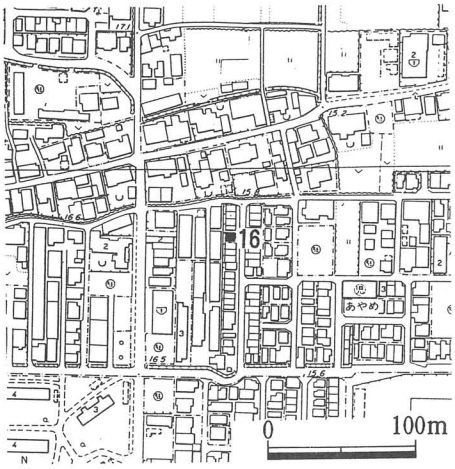


図13. 嶋上郡衙跡の調査位置図(4)

察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.5m）・耕土（0.15m）・暗灰色土層（0.1m）・黄灰色土層〔地山〕である。調査区が狭小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。（大船）

Ⅱ．前塚古墳

17．前塚古墳の調査

前塚古墳は北西から南東へ緩やかに傾斜する標高26～27mの平野部に位置している。背後の丘陵には弁天山古墳群、すぐ南には今城塚古墳と三島地方を代表する大型古墳が集中する地域にある。

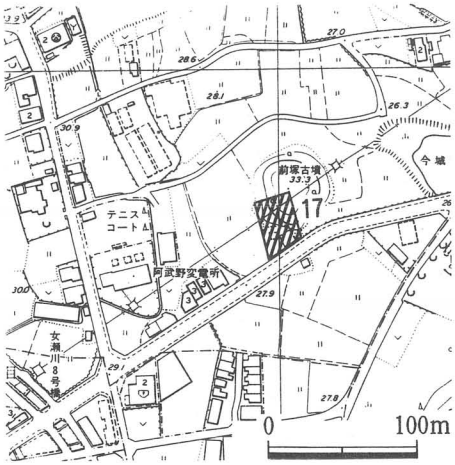


図14．前塚古墳の調査位置図

墳丘はふるくに削平・開墾をうけて旧状をとどめず、周濠南側は府道によって分断されている。現存する墳丘は直径64m、高さ7mである。1988年に実施した調査によって全長94m、後円部径69m、前方部長25mをはかる5世紀前半頃の帆立貝形古墳であることが判明している①。内部施設については知られていないが、明治年間の開墾中に長持形石棺が発見され、現在は大阪府立茨木高校に保存されている。

今回の調査地は高槻市岡本町33－2・94－1番地にあたり、1988年の調査地の東に隣接する。小字は塚ノ前である。共同住宅の建設によって墳丘の一部が削られるため、事前に調査を実施した。

遺　構（図版第19～22・35，図15・16）

工事による墳丘の削平は一部にとどまるため、調査は盛土の確認と葺石・埴輪列の検出を目的としたトレンチを数カ所設定しておこなった。以下、トレンチごとに概要を述べる。

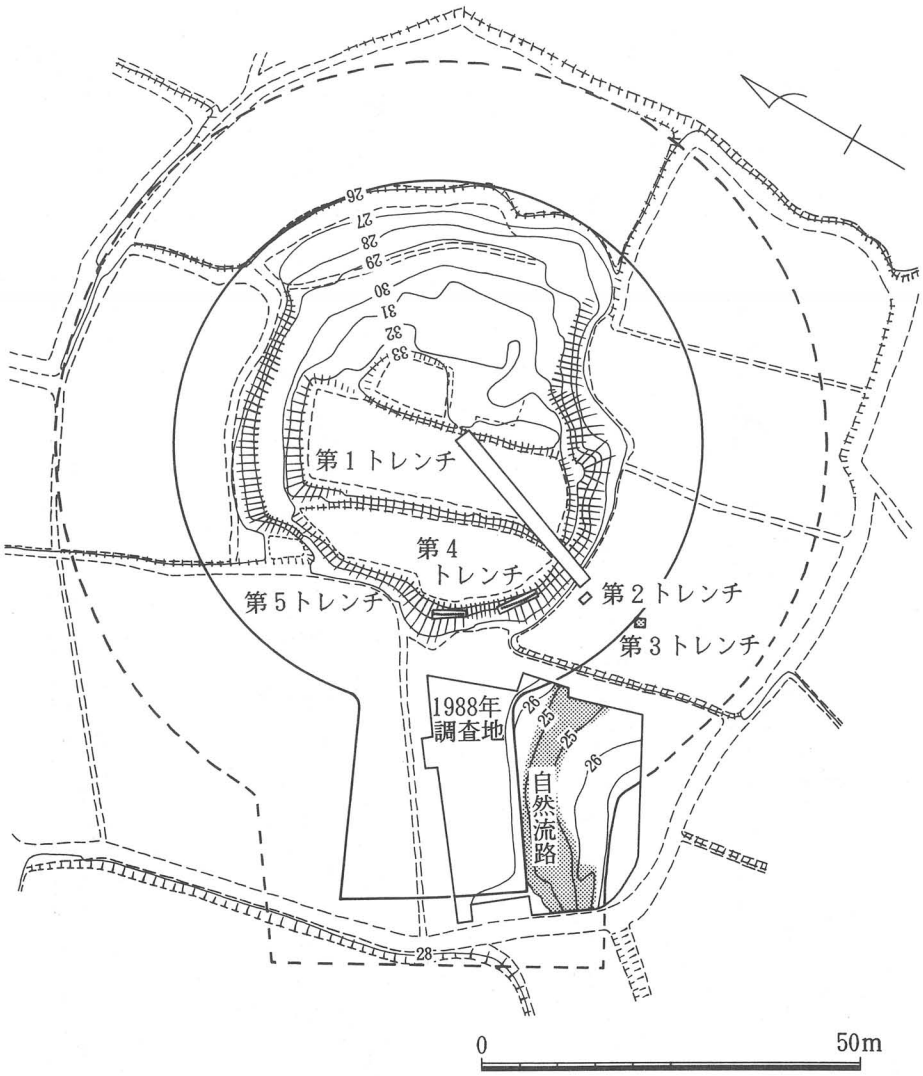


図15. 前塚古墳　平面図

第１トレンチは墳丘の南縁から中心に向かってのびる長さ６ｍ・幅２ｍの細長いトレンチである。墳丘裾で６ｍ、中心部では３ｍの深さまで掘削したが、壁面崩壊の危険があったため、一部で地山の確認をするにとどめた。断面を観察すると、墳丘盛土の状況は比較的良好である反面、墳丘裾部と上面はかなり削られていることがあきらかになった。とくに裾部は瓦製作用の粘土採取のために削られ、その後は盛土されていた。遺物は表土・整地土より円筒埴輪や家形埴輪の小片が出土したのみである。

第２・第３トレンチは墳丘基底および周濠の検出を目的として設けた小規模なトレンチである。調査の結果、前回の調査で確認した中世頃の流路が続き、墳丘を侵食し

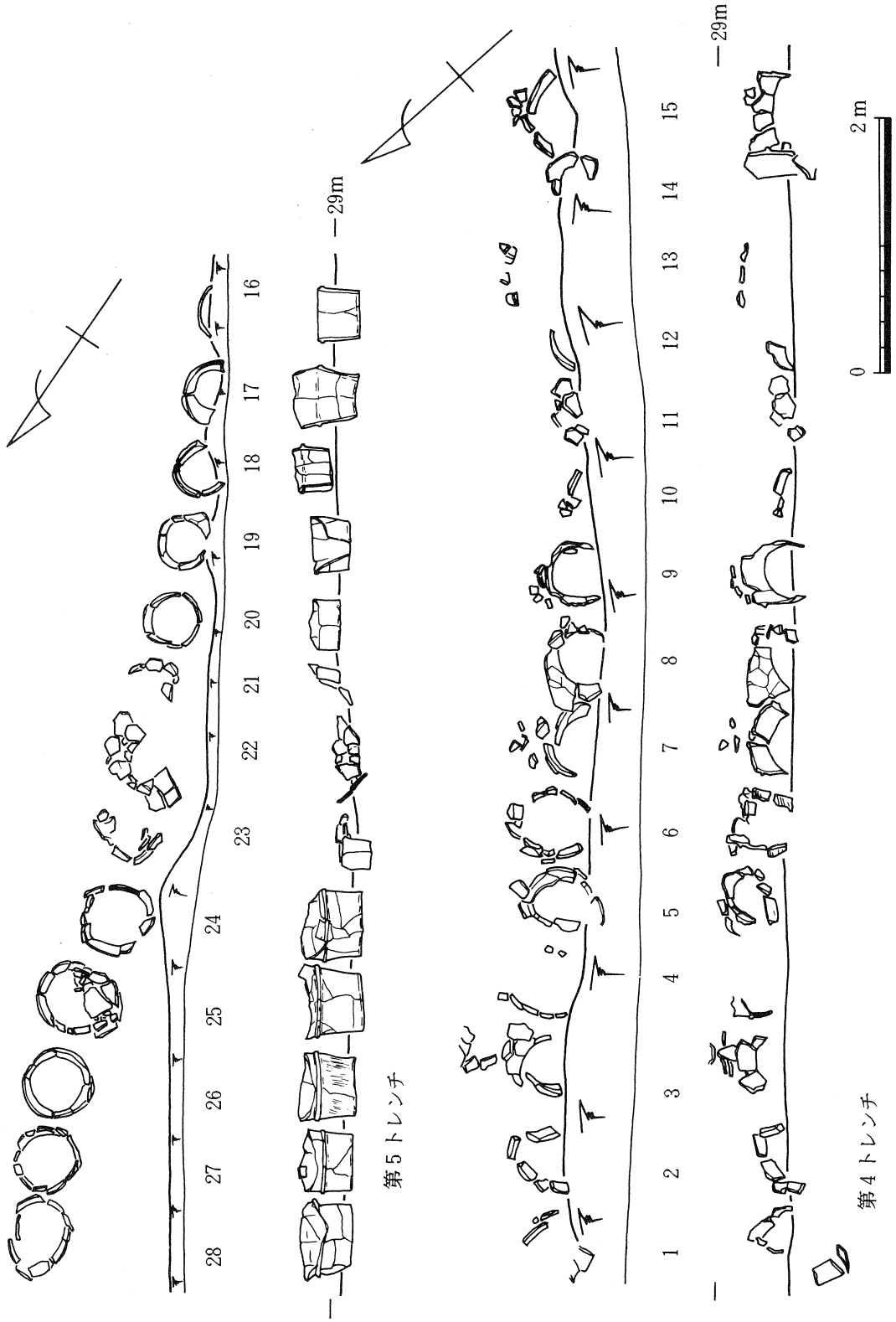


図16. 第4・5トレンチ埴輪検出状況

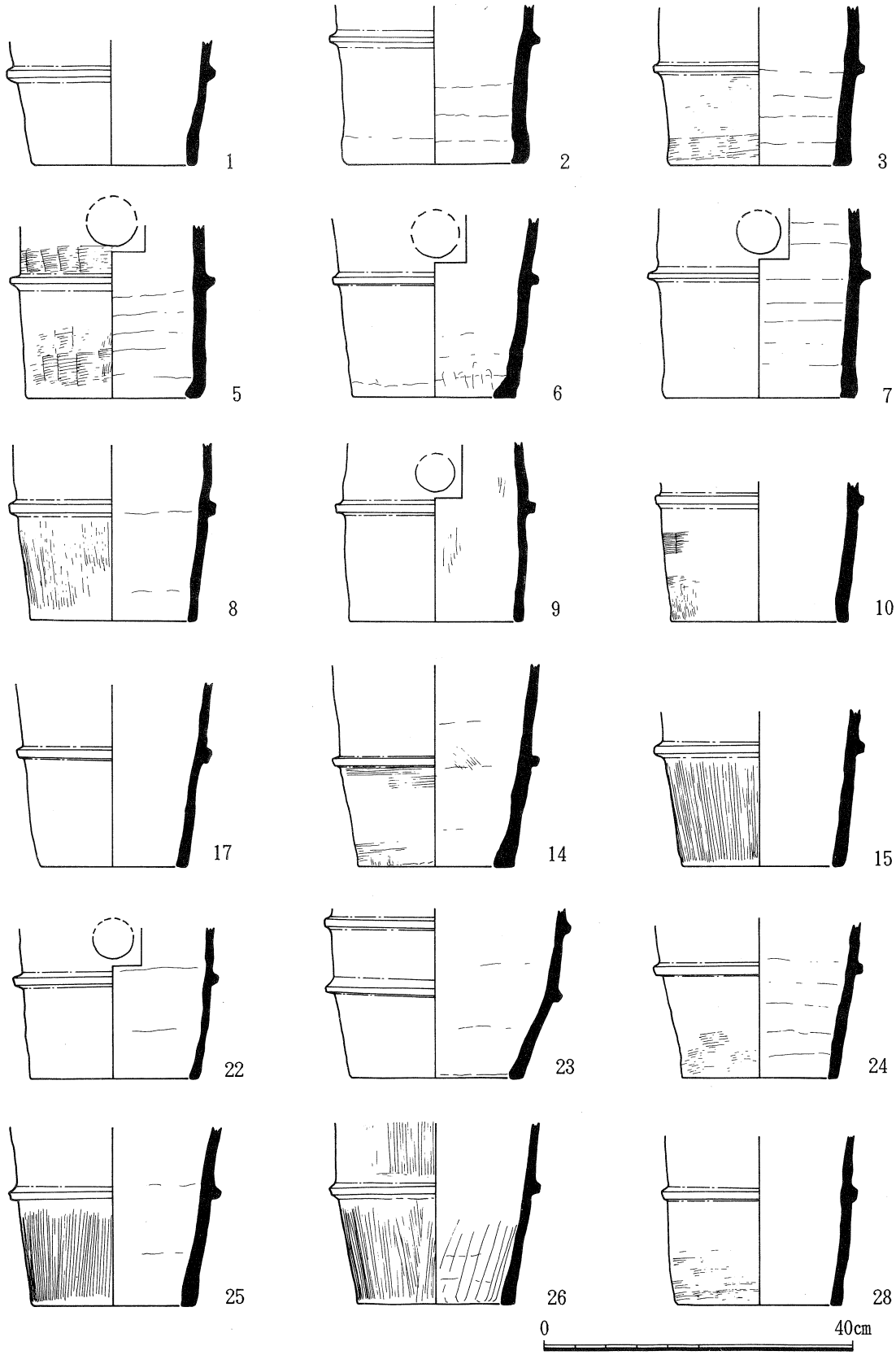


図17. 円筒埴輪実測図（1～3・5～10・14・15：第4トレンチ，17・22～26・28：第5トレンチ）

ていることが判明した。

後円部西側では２ケ所の墳丘崩壊面で埴輪が露出しているのを発見し、ただちに調査をおこなった。第４トレンチは後円部南西側くびれ部付近に位置する。約10ｍの間に15本の円筒埴輪が並んでいた。しかしその遺存状態はわるく、すべて一段目のタガまでしかのこっていなかった。

第５トレンチは調査区北東隅、第４トレンチの北側に位置する。８ｍの間に13本の円筒埴輪が並び、さらに調査区外に続いていた。埴輪は第４トレンチと同様に一段目タガより上の部分は遺存しない。埋土を観察すると、一段目タガより上は土取りのために攪乱をうけていた。第４～第５トレンチ間は墳丘の崩壊が進行しているために埴輪列は残っていなかった。

遺　物（図版第23～25，図17）

今回の調査で検出した遺物はすべて埴輪である。これらのほとんどが円筒埴輪であって、大半が第４・第５トレンチからの出土である。

円筒埴輪は23をのぞいて一段目タガより上が遺存するものはない。これらの底部径は22㎝前後をはかり、その大きさはほぼ一定である。形状的には基底部が直線的にのびるものと下方へいくにしたがってすぼまっていくものが半々の割合である。タガは高さ１㎝前後で断面はほぼ台形をなしているが、方形に突出したものや上下非対称のものなどの個体差がみとめられる。スカシは円形で、５～７・９・22のみ２段目に穿たれている。外部調整はタテハケのほか、タテハケ後の二次調整にＢ種ヨコハケを施すものがある。内面はナデ調整で一部にタテハケがのこるものがある。色調は明茶灰色～淡黄灰色を呈し、外面には黒斑がある。これらの円筒埴輪は形態や調整手法等の特徴から数種類に分類可能である。これは各工人の技術やくせを反映していると言えよう。

小　結

今回実施した後円部の調査は、小規模のトレンチ調査ではあったが、いくつかの事実があらたに判明した。

墳丘は後世にかなり削平・攪乱をうけていた。近世以降、前塚古墳の所在する岡本やその周辺地区ではさかんに瓦が焼かれ、瓦用の粘土採取坑は市内各地で検出している。前塚古墳も粘土をかなり採取されたようである。墳丘断面をみると、粘土採取はテラス部分よりこれと平行する高さで掘り進められている。さらに開墾時には墳丘を

削平し、粘土採取坑を埋めて耕作地を拡大している。

埴輪列は２ケ所で検出した。遺存状況は良くないがほぼ原位置をたもっている。後円部北側でも同一レベル上にある円筒埴輪を数か所で確認しており、これらを結ぶと直径約46ｍで後円部を巡っていることがわかった。この埴輪列はレベルや位置関係から一段目テラスにあったとするのが妥当である。

墳丘に関しては第１トレンチによって盛土の状況を知ることができた。盛土の基底部、地山の直上には黒色粘質土を幅約30㎝、厚さ10～15㎝ほどのブロックにして丁寧に積み重ねて幅約60㎝の厚さにしている。この黒色粘質土は古墳築造時にあった表土とかんがえられる。ブロック層の上には地山と同質の青灰色・黄灰褐色砂質土を積んでいる。これは表土を取り去った後にあらわれた地山を積み上げたとかんがえられよう。この層の上には１～1.6ｍの厚さを一単位とした盛土を順次おこなっている。この単位は全部で６単位分検出した。積み方に関してみてみると、それぞれの盛土単位は墳丘中央部より外側へ向かって積まれている。土質の選定に関しては明確なパターンは認められず、たたきしめも顕著ではない。しかしながら、粘土は墳丘の表面近くには積まないようにし、表土ブロック以外のブロック土層では粘土と砂もしくは砂質土を組み合わせて積む傾向がある。このような盛土は百舌鳥大塚山古墳②でも報告されている。それによると、旧表土をブロック状に積み地山土をその上に積んでいることや、数段に分けて盛土をすること、盛土のたたきしめが顕著でないなどの共通点がある。

次にこの盛土単位から後円部の高さを復元してみよう。現存する墳丘は５単位目までで、くびれ部の基底から約 5.5ｍを測る。明治時代に発見された長持形石棺は報告③によれば、最上段にある畑の開墾中に出土したとある。その埋まっていた痕跡は現在でも凹地として残り、石棺がちょうど６単位目におさまっていたことがわかる。その上には墳丘の形状を整えるためにもう１単位分の盛土作業をおこなったとみた場合、後円部はくびれ部から測って約８ｍと推定できる。

墳丘築造の工程は弁天山Ｃ１号墳後円部④・五色塚古墳後円部⑤・百舌鳥大塚山古墳前方部などの前期～中期古墳であきらかにされている。この３古墳に共通するのはいずれも墳丘外周部に断面三角形もしくは台形の小山をつくり、それを内側に拡張して墳丘を形成していくことである。前塚古墳ではこれとは逆に墳丘外側にむかって盛土をおこなっていた。小山に関しては外周部削平のために確認できなかった。しかし

ながら、それぞれの盛土単位は墳丘外周付近で高くなり、上面がやや内傾した状態になっている。墳丘の中心から外側へむかって盛土をおこなう例としては岡古墳⑥・唐櫃山古墳⑦・矢倉古墳⑧などがあげられる。岡古墳は墳丘の中心部と外縁部に高さ１ｍ前後の小山をつくり、その間を内側（南側）から外側（北側）へむかって埋め込んでいる。唐櫃山古墳では外周部に小山がみとめられるものの、盛土単位の厚さが0.6ｍ前後と先述の古墳が厚さ１～ 1.5ｍ前後であるのにくらべてうすくなっている。矢倉古墳は墳丘中央部より盛土を始め、外側にむかって積む。外周部の小山は墳丘が削平されているためにあきらかでない。ここでも横方向の盛土単位が認められ、厚さは唐櫃山古墳とおなじ 0.6ｍ前後である。その単位は外周部にむかうほどうすくなり、前者とくらべ粗雑な積み方になっている。

このように外周部に小山を作り、水平方向の単位ごとに積む盛土の方法は古墳時代前期～中期初頭には顕著にみられる。時代がくだると盛土単位がうすくなるなど積みかたは徐々に変化するが基本的には変わらない。これがおおきく変わるのは横穴式石室の導入以後であろう。（宮崎）

注

① 宮崎　康雄　「前塚古墳の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・１３』 高槻市教育委員会　１９８９

② 樋口　吉文　「百舌鳥大塚山古墳発掘調査報告」『堺市文化財報告第４０集』　堺市教育委員会　１９８９

③ 梅原　末治　「摂津国三島郡岡本村前塚の石棺に就て」『考古学雑誌』　第三巻　四号　１９１２

④ 原口　正三　西谷　正　「弁天山Ｃ１号墳」『弁天山古墳群の調査』　高槻市教育委員会　１９６７

⑤ 神戸市教育委員会　『史跡五色塚古墳　復元・整備事業概要』　１９８２

⑥ 天野　末吉　『岡古墳　－古市古墳群の調査研究報告Ⅰ－』　藤井寺市教育委員会　１９８９

⑦ 一瀬　和夫　『唐櫃山古墳発掘調査概要』　大阪府教育委員会　１９８６

⑧ 森田　和伸ほか　「矢倉古墳」『古市遺跡群Ⅸ』　羽曳野市教育委員会　１９８５

Ⅲ．郡家今城遺跡

18．郡家今城遺跡（90－1）の調査

高槻市氷室町一丁目781－46番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西側中央部に位置し、遺構の分布が希薄な地域にあたる。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることから、北西部に２ｍ角のトレンチを設け層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.5ｍ）・耕土（0.15ｍ）・床土（0.2ｍ）・暗褐色土層（0.2ｍ）〔遺物包含層〕・暗黄褐色土層〔地山〕である。今回の調査区は狭小なこともあり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。（大船）

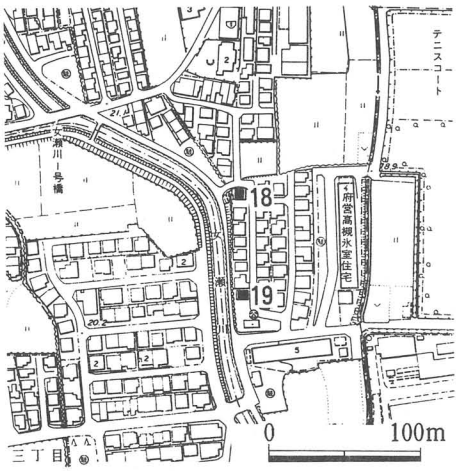


図18．郡家今城遺跡の調査位置図(1)

19．郡家今城遺跡（90－2）の調査

高槻市氷室町一丁目781－32番地にあたり、小字名は下河原と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の西端に位置し、女瀬川がすぐ西側を南流する地域にあたる。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることから、北東部に２ｍ角のトレンチを設け層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.6ｍ）・耕土（0.1ｍ）・床土（0.1ｍ）・暗灰色砂層〔地山〕であり、女瀬川の堆積が厚く認められた。今回の調査区は狭小なことと女瀬川の堆積層等もあって、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。（大船）

20. 郡家今城遺跡（90－3）の調査

調査地は高槻市郡家新町141－1番地にあたり、小字名は藤ケ本である。現状は畑である。今回、個人住宅建設が計画されたため、事前に調査を実施した。

調査地は、遺跡の中心部とされる府立三島高校の北東に位置する。この付近は、これまでの知見によれば、遺跡の縁辺に近く、遺構密度のさほど高くない地域とされていた。そのため、調査はまず試掘坑を設けておこなった。しかし予想に反して柱穴をはじめとする遺構がややまとまって検出されたため、調査区を東西に二分して設定し、反転して実施した。結果的には、届出地のほぼ全域にあたる、南北14m、東西7mの範囲を発掘したことになり、さらに可能なかぎり拡張して遺構の確認につとめた。層序としては、厚さ0.2～0.4mの耕土・床土のすぐ下は黄灰色粘土の地山で遺構面となり、遺物包含層は認められなかった。地山面の標高は16.8mほどである。

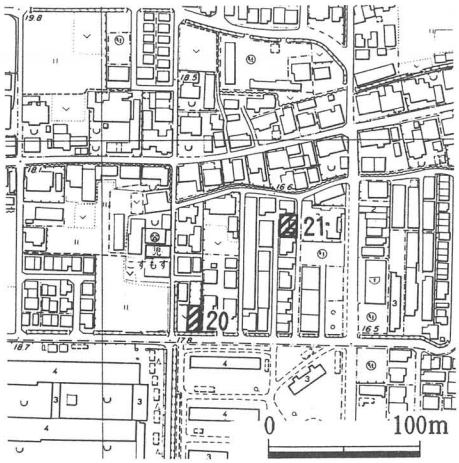


図19. 郡家今城遺跡の調査位置図(2)

遺　構(図版第26a, 図20)

検出した遺構は、掘立柱建物、土坑、小溝等である。

掘立柱建物は、4棟検出したが、調査区の関係上すべての柱穴を確認しえたのは、そのうち1棟のみで、他は調査区外へ延びている。

建物1は、調査区東寄りで検出した南北棟である。桁行5間（12m、2.4m等間）、梁行1間(2.4m)を確認しているが、東半部は調査区外である。主軸の方位はN－15°30′－Eである（方位は磁北を使用、以下同じ）。掘形は、やや不整形ではあるが、一辺1.0m～1.3m、深さ1.0m程の方形で、郡家今城遺跡としてはかなり大きな部類に入る。そのうち4つの掘形には、直径0.3m前後の柱根が遺存していた。また、柱根や柱痕跡の下には、拳大ないしは人頭大の石を入念に組んで根固めとしているものや、柱を直接受けずに柱の回りに石を並べているものがある。当地の地表下0.5mでは湧水の激しい灰色砂となり、非常に地盤が弱い。こうした施設は、柱の沈下を防ぐために施されたとみられる。

建物1は、現時点では、桁行も梁行も不明である。しかし郡家今城遺跡では、桁行

6間以上の建物は未検出である点、そして桁行5間の建物は、いずれも梁行2間である点を考慮すれば、桁行5間、梁行2間の建物に復元するのが妥当であろう。

建物2は、調査区北寄りで検出した。確認できたのは西側柱2間(4.2m、2.1m等間)と、南側柱1間分(2.1m)、そして北側柱2間分(4.2m、中央掘形は未確認)である。主軸の方位はN－9°－Eである。掘形は、一辺0.6～0.7m、深さ0.2～0.4mの方形あるいは不整形を呈する。そのうち、北側の一つは建物1の掘形に切られている。検出したこれらの掘形から、建物2の全体を復元するのは非常に困難であるが、一応、西側柱を妻として、南側柱の2間目の掘形を建物1により壊されたものと考えて、桁行3間以上、梁行2間の東西棟としておく。

建物3は、調査区西寄りで検出した。その大半は、調査区外で東側柱2間(3.8m、1.9m等間)、南側柱1間分(1.9m)を確認した。方位はN－16°－Eである。掘形は一辺0.5～0.6m、深さ0.3～0.4mの方形を呈する。現状では、桁行2間以上、梁行2間の東西棟に復元しておく。

建物4は、調査区南寄りで検出した東西棟である。桁行2間(4.5m、2.25m等間)、梁行2間(3.35m、南柱間1.75m、北柱間1.6m)だが、北側柱の中央掘形を欠く特異な構造を持つ。東側柱のうち、南の二つには径0.12mの柱根が遺存しており、また北の掘形は建物1に切られている。方位は、N－18°－Eである。なお西南隅の掘形は、調査終了後、建築工事の際に確認したものである。

土坑1は、北寄りの東壁際で検出されたが、その半分以上が調査区外になる。現状では径1m、深さ0.5mのスリバチ状の土坑とみられる。

土坑2は、土坑1のすぐ南で検出したが、やはりその大半は調査区外となる。南北0.9m、東西1m以上の方形の土坑とみられる。

土坑1・2の埋土はいずれも、建物の掘形と同質なので柱掘形かもしれないが、現時点ではその性格は不明である。

土坑3は、北より西壁際で検出した。深さ0.1mの浅い不定形の土坑で、調査区外に延びている。

小溝1は、調査区やや南よりを東西に走る溝である。幅約0.3m、深さ5cmをはかり、建物1の掘形を切っている。

小溝2は、小溝1の南で検出した。幅約0.3m、深さ5cmで、建物1の掘形を切っている。

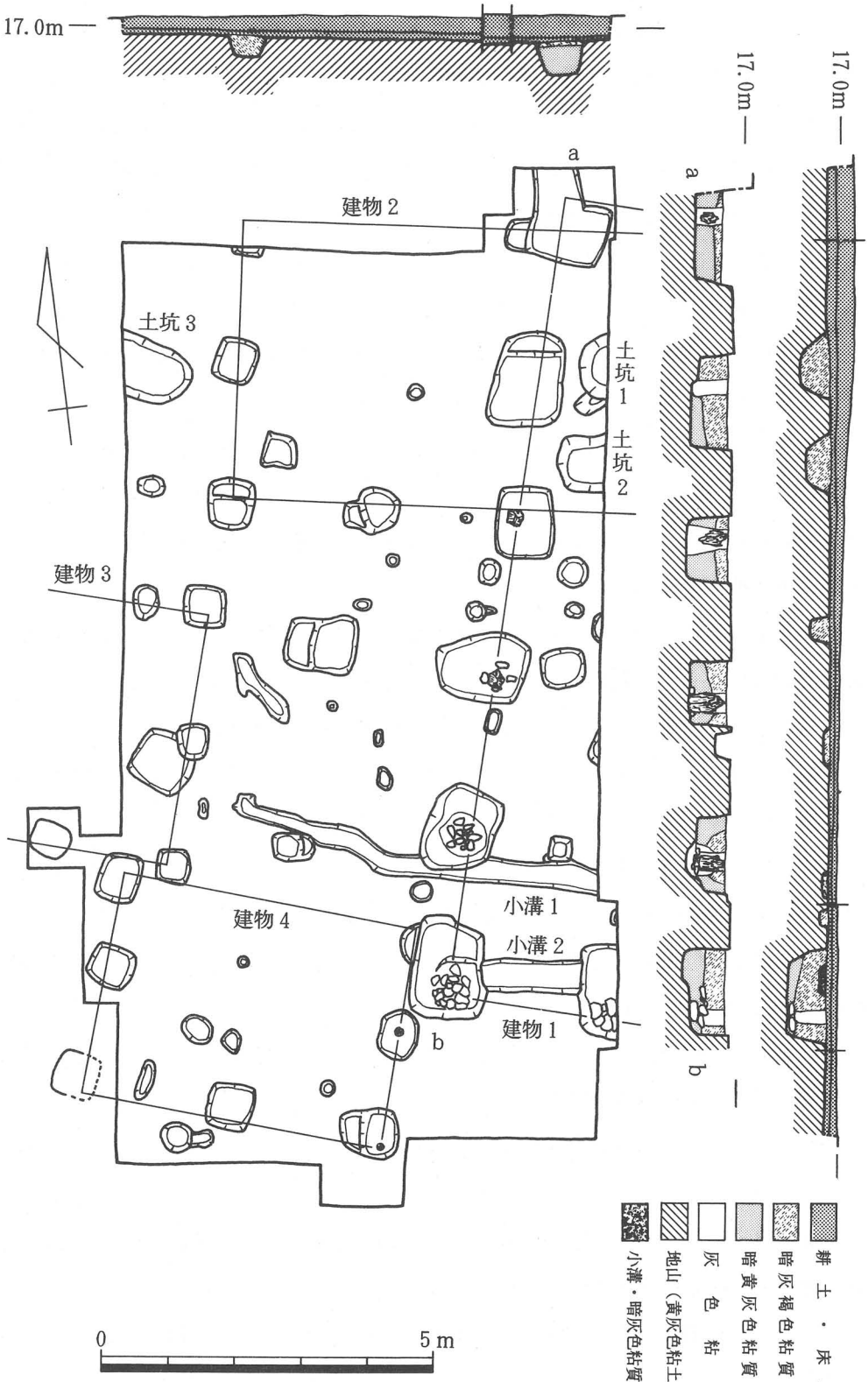


図20. 郡家今城遺跡（90－3）遺構図・土層図

遺　物（図版第26ｂ）

遺物としては、須恵器・土師器等の土器があるが、量としては非常に少なくコンテナパッド一箱分にも満たないほどである。いずれも小片で完形に復元できるものは皆無で、遺存状況もよくない。おおむね奈良～平安時代の年代が与えられる。

そのほか、製塩土器が出土している。建物の掘形・土坑・小溝・小穴の各遺構の埋土から出土しており、総数90点におよぶ。そのうち建物１出土のものは、56点を数える。胎土は径１㎜から大きなものでは５㎜の砂粒を含み、外面は粗面を呈し、内面はナデで平滑に仕上げる。布目やハケ調整を施したものはみられない。口縁の形態は、外反する口縁端部を水平に面取りしたもの（３・５・14）、外反する口縁外面を斜めに面取りするもの（１・９）、外反あるいは真上にのびる口縁端部をそのままつまみあげるもの（２・４・７・８・10・12・13）がある。

小　結

今回検出した４棟の掘立柱建物について、遺構の切り合いと、主軸の方位をてがかりに、その前後関係と年代を検討してみよう。

まず、建物１は建物２と建物４の掘形を切っており、両者より新しい。一方、建物３と建物４は、切り合ってはいないが非常に近接しているので、同時に存在したとは考えられない。ここで各棟の方位をみると、建物２のみ10°以下で、15～18°の振れをもつ他の３棟とはかけ離れている。同時代の建物はほぼ同じ方向性を示すと考えられるので、建物１・３・４は方位のうえではほぼ同時期で、建物１に切られる建物２は、これらよりも古いと考えることができる。

以上をまとめると、建物２→建物４→建物１・建物３の変遷が想定できる。そして、建物４と建物１との時期差はほとんどなく、また建物１と建物３は同時存在の可能性が考えられる。

ところで、高槻市域の奈良～平安時代の掘立柱建物は、時代が降るにつれて主軸の方位が西から東へ振っていくことがわかっている。また、９世紀後半頃には、山陽道の再整備に伴って、東に振っていた軸が西へ大きく振りもどすことが近年明らかにされた［「郡家今城遺跡（89－２）の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・14』　1990　高槻市教育委員会］。これまでの調査で得られたデータによれば、東に振っている角度がおおむね10°以下のものは９世紀前半、15°前後のものは９世紀後半の年代があたえられている。今回の調査でもこうした傾向はあてはまり、建物２は９

世紀前半から中頃、建物４・１・３は９世紀後半の年代を想定できる。

これまで、郡家今城遺跡の北東辺においては様相が不明であった。しかし今回の調査で掘立柱建物群が検出され、さらに周囲に広がっている可能性が出てきた。今後の周辺での調査が期待される。（高橋）

21．郡家今城遺跡（90－４）の調査

調査地は高槻市郡家新町148－２番地にあたり、小字名は藤ケ本と称する。郡家今城遺跡の東北部にあって、西国街道の南側約50ｍに位置する。現状は宅地で、今回個人住宅建て替えに伴い立ち会い調査を実施した。

調査は建物基礎掘削後、断面観察を行って基礎が盛土内におさまっていることを確認して終了した。（鐘ヶ江）

Ⅳ．郡家本町遺跡

22．郡家本町遺跡の調査

高槻市郡家本町1563－6番地にあたり、小字名は東上野と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の南西部に位置し、南側の調査結果などからほとんど遺構の分布が確認されていない地域である。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることから、中央部東側に２ｍ角のトレンチを設け小型ユンボを使用して層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（１ｍ）・耕土（0.1ｍ）・灰黄褐色粘土層〔地山〕である。調査区が狭小なこともあって、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。（大船）

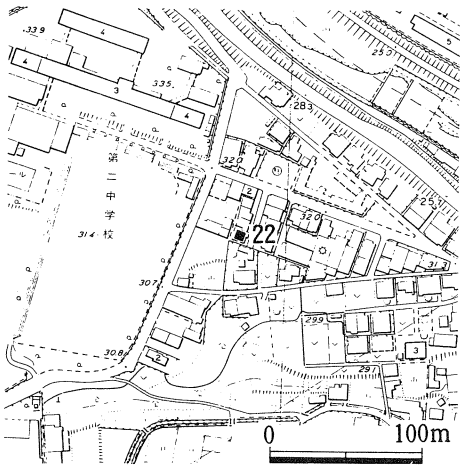


図21．郡家本町遺跡の調査位置図

Ⅴ．津之江南遺跡

23．津之江南遺跡の調査

調査地は高槻市津之江北町267－3番地にあたり、小字名は岸ノ下と称する。遺跡の南限に近く、阪急電鉄京都線のすぐ北側に位置する。東接する南北水路では昭和63年度調査の際に弥生時代前期の土器棺墓などを検出している。

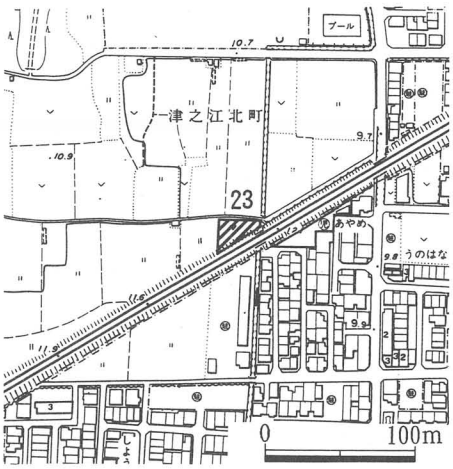


図22．津之江南遺跡の調査位置図

調査は、届出地中央に南北方向の調査坑を設定し、人力で掘削して遺構・遺物を精査した。基本的層序は、耕土・床土（0.2m）・明灰色砂質粘土（0.15m）・灰白色～黄白色砂（0.1m）・明灰色砂（0.25m）・黄褐色砂（0.1m）・礫まじり黒褐色粘土［遺物包含層］（0.1～0.2m）となり、灰緑色粘土ないし青灰色砂礫の地山となる。地山面はやや南に傾斜し、北端での標高は約9.8mをはかる。

遺構としては、調査坑中央部で幅1.2m、深さ0.25mをはかる東西方向の溝１条を検出した。堆積土は黒褐色粘質土である。遺物が出土しなかったため、時期は不明である。

遺物は、溝・遺物包含層ともに土器細片の存在が知られる程度であり、遺物包含層の時期自体も特定できなかった。（鐘ヶ江）

Ⅵ．塚脇古墳群

24．塚脇古墳群（Ｆ－１号墳）の調査

塚脇古墳群は、高槻市を代表する古墳時代後期の群集墳である。塚脇古墳群が展開する帯仕山は、市域の平野部が北方の山間部に変換する地域、ちょうど名勝摂津峡の東約１㎞に位置し、標高は192.34mを測る。この付近は、十数年前から宅地化が進み、

それに伴って数基の古墳が調査されている。

これまで古墳の分布は、帯仕山裾部の東斜面と南斜面に限られるとされてきた。しかし今回西斜面において、新たに古墳が一基発見され、その周囲にはさらに二基以上の古墳の存在が想定できる。この西斜面に分布する古墳をＦ群としてとらえ、今回調査した古墳をＦ－１号墳とした。

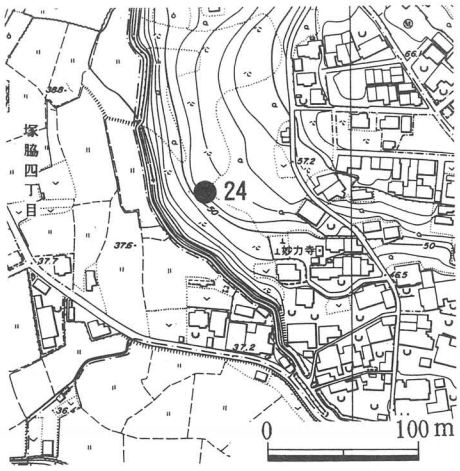


図23. 塚脇古墳群の調査位置図

Ｆ－1号墳は高槻市塚脇１丁目294番地に位置し、小字名は宮垣内である。寺域拡張の伐採に伴って発見され、測量調査の後、内部主体と墳丘規模の確認を目的として発掘調査を実施した。ただし、寺域境界線がＦ－１号墳の中央をはしり、全面の発掘は不可能であること、また寺域拡張が即座に古墳の破壊に至らないことから、調査は必要最低限の調査区でおこなった。

なお二月末現在、調査継続中であり、また出土遺物の整理も緒についたばかりなので、本概報では遺構の概略を記すにとどめ、遺物の詳細については次年度に報告することとする。

測量調査

調査前のＦ－１号墳は、墳丘が小高く盛り上がり、墳頂部は中央部がややくぼみ、そのすぐとなりには一辺１ｍほどの石が一個露出していた。地形測量の結果によれば、直径20ｍほどの円墳で、内部主体は横穴式石室であることが予想されたが、天井石は既に抜きとられている可能性が強いとおもわれた。また、古墳の北西から南西方向はすぐに斜面となるのに対し、北から南東方向にかけては平坦面がひろがっており、Ｆ－１号墳は傾斜変換点の突端部に築かれていることも指摘できた。墳頂部の標高は50.7ｍである。

内部主体(図版第27～30・32・37)

内部主体は南西方向に開口する片袖の横穴式石室である。玄室長4.3ｍ、幅2.5ｍ、羨道長3.6ｍ、幅1.4ｍで、奥壁に向かって右側に袖石をもつ。

天井石はおろか側壁の上部の石のいくつかも抜き取られ、あるいは破壊されて、奥

壁では2段、玄室では2段ないし3段分が残存している。そのもっとも良好な部分の床面からの高さは1.7mを測る。壁面はおよそ75～80°の角度で内傾している。床面には人頭大の平石を用いて敷石を施している。敷石面の標高は、48.4mである。

羨道では2段分の石が残存していて、その高さは1.2mを測る。また羨道中央部では閉塞石が良好に遺存している。閉塞石は、内側の前面のみすべて石を組んでいるが、これより後部は高さ0.5mの土の上に石を積んでいる。閉塞石の内側には玄室と一連の敷石がみられるが、外側は褐色系の地山面となり、外側にむかってゆるやかに上がっている。

玄室のほぼ全域にわたり、敷石の直上層から各種の遺物が出土している。しかし非常に散乱した状態で出土しており、原位置を保つものはない。

主なものに、鉄地金銅張馬具（鞍磯金具・轡・雲珠・辻金具・絞具など）、金銅製飾金具、直刀、鉄製鏃、鉄斧、ガラス小玉、耳環（6個体）、須恵器、そして人骨、歯などがある。一方、羨道の閉塞石内側では土器がまとまって出土した。須恵器では台付長頸壺、無蓋高杯、蓋杯、土師器では長頸壺がある。

今後、遺物の細かい検討が必要だが、古墳の年代としては、一応6世紀後半やや古い時期としておきたい。

墳　丘(図版第31・36)

墳丘の構築状況と周溝の規模を確認するために、石室後方（Aトレンチ）、横方向（Cトレンチ）、そしてその間（Bトレンチ）に、石室を中心として放射状に調査区を設定した。

墳丘内には意外にも、2条の石列が検出された。この石列は3本のトレンチすべてで確認され、石室を中心としてややいびつながらも円をえがいている。

内側の石列は人頭大ないしひとかかえ大の石を、小口を外側に揃えて石垣状に入念に積み上げている。その高さは1.3～1.4m、傾斜角度はおおむね60°で、掘形は認められない。この石列は、羨門脇の4つの石に連続し、当初は石室とも連なっていたものと考えられ、その直径はおよそ13.5mに復原できる。

外側の石列は、同様の石を高さ0.3～0.4mほどに低く積んでいて、掘形は認められない。墳丘南端ではこの石列の延長部分と思われる石群が検出されている。また各トレンチともに石列の外側直下からスロープ状に落ち込んで周溝となることから、墳丘裾部を全周していたのであろう。その直径はおよそ20mに復原できる。

墳丘盛土は、石室・内側石列間と、内側石列・外側石列間では全く様相が異なる。

前者の下層は黄褐色土と暗灰色土の互層、上層は暗黄褐色土で、よく締まった土であり、石室構築時に盛られた土である。後者は墳丘を構成する、内側石列を埋めるように盛られた土で、全般的にやわらかく、やや不安定な層である。しかしどちらも旧表土と思われる黒色土の上面から盛られている。ちなみに石室の掘形はこの黒色土を掘込んで作られている。

周溝は、斜面を下るにしたがい幅と深さを増している。すなわち、Aトレンチでは幅1.7m、深さ0.2m、溝底の標高49.1m、Bトレンチでは幅2.9m、深さ0.5m、標高48.6m、Cトレンチでは幅4.6m、深さ0.5m、標高48.5mである。しかし傾斜角度が急な石室前面部分では周溝はつくられておらず、墳丘を囲繞してはいなかったと考えられる。

小　結

以上が塚脇F－1号墳の概略であるが、本古墳の特徴である2条の石列について記し、若干のまとめとしたい。

まず、内側石列は石垣状に積み上げられ、石室のまわりを囲うようにめぐっている。石室と石列の間の土は石室構築時に順次盛られた土で、非常に締まっている。石列には掘形が認められないので、この土と石列は同時に積まれたものであり、内側石列は石室構築の一連の工程で築かれたとみることができる。その性格は土留め状の擁壁施設と考えておきたい。

次に、外側石列は、内側石列を埋没させるように盛られた墳丘構成土を利用して築かれている。その位置は墳丘裾部に対応し、石列の外面は墳丘表面に露出して全周しているとみられることから、外側石列は墳丘裾部をあらわす外表施設であると考えられる。

このように両石列の性格は異なり、内側石列は石室構築という古墳築造の第一段階に属し構築土の崩壊を防ぐという機能があるのに対し、外側石列は第二段階である墳丘築成時に外表施設としてつくられたのであろう。

ところで、後期群集墳のなかには、「外護列石」あるいは「列石」と呼ばれる葺石状の墳丘装飾施設をもつものがある。また、墳丘の下層にもこのような「列石」をもつ例もみうけられる。それらは近畿一円では、山城西北部・丹波・但馬地方に分布することが知られる。

本古墳の石列も一見すると、これらとの共通点も指摘できる。しかし、内側石列が石室構築の一環として非常に高く積み上げられている点、また外表施設である外側石列が石室前方を特に意識せず全周にわたって低く積まれている点で、大きく異なっている。また時期的にも本古墳がやや先行するようで、これらとの関係については重要な問題点であり、慎重にあつかうべきであろう。

本古墳は塚脇古墳群のうちでは古い時期に属し、また規模も大きく古墳群の成立や構成、あるいは性格を語るうえでなくてはならない古墳である。今後、遺物の整理作業が進展した後、あらためて検討したいと思う。（高橋）

Ⅶ. 大蔵司遺跡

25. 大蔵司遺跡の調査

高槻市大蔵司３丁目209番地にあたり、小字名は二黒と称する。現状は宅地である。

調査は届出地の中央部のやや北側に２ｍ×2.5ｍのトレンチを設定し、重機で表土を除去した後、人力で地山面まで掘り下げて遺構検出作業をおこなった。層序は盛土・整地土（１ｍ）・暗灰色粘土（0.15ｍ）〔耕土〕・茶灰褐色粘質土（0.1ｍ）〔床土〕・暗灰褐色粘土（0.6ｍ）〔遺物包含層〕・暗灰褐色礫土〔地山〕である。地山は緩やかに西側に傾斜している。明確な遺構は認められらなかった。

遺物は包含層より若干の土師器片が出土している。１は口径16.1㎝、器高12.5㎝を測る高杯である。杯部は底部より内湾して上外方へ開き、口縁端部がわずかに外反し、

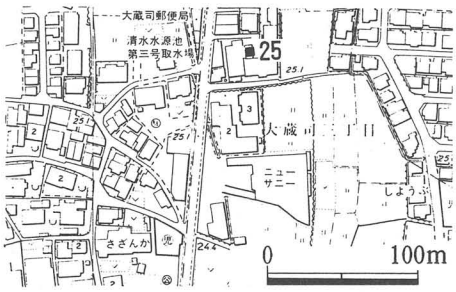


図24. 大蔵司遺跡の調査位置図

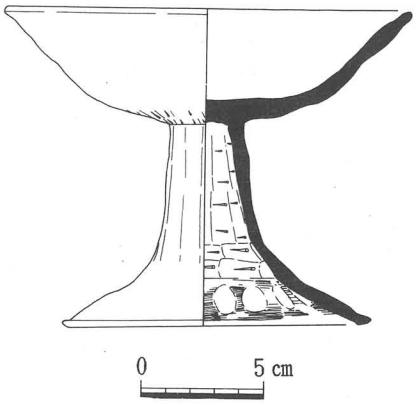


図25. 大蔵司遺跡出土遺物

丸くおさまる。脚部は屈曲して直線的にのび、脚端部は面をもつ。古墳時代前期と考えられる。

今回の調査では地山が生活にあまり適していない礫土のためか遺構は検出できなかった。しかしながら、完形に近い高杯の出土からみて、付近に古墳時代の何らかの遺構が存在する可能性も考えられる。（北原）

Ⅷ. 芥川遺跡

26. 芥川遺跡の調査

高槻市殿町68－２番地にあたり、小字名は殿ノ内と称する。現状は宅地である。調査地は昨年度に調査した殿町70－１番地の西隣に位置し、遺構の分布が希薄な地域にあたる。調査は届出地の中央に２ｍ×３ｍのトレンチを設定し、重機で表土を除去した後、人力で掘削して遺構を精査した。

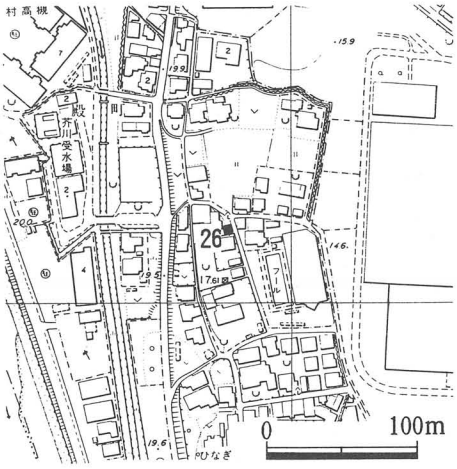


図26. 芥川遺跡の調査位置図

基本層序は表土（0.12ｍ）・茶褐色土（0.14ｍ）〔整地層〕・近世～近代の溝による攪乱土（0.3ｍ）・灰褐色土（0.3ｍ）〔遺物包含層〕・茶褐色砂礫土〔地山〕である。地山面の標高は15.9ｍをはかる。

遺構・遺物（図版第33, 図27）

溝１は東西方向にのびる幅1.5ｍ、深さ0.4ｍの石組の溝である。出土遺物からみて明治頃まで存続していたと考えられる。前回の調査（「芥川遺跡の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・14』1990）で検出した溝の続きであろう。中世以前の包含層は溝１による削平のため部分的に残るのみであった。

遺物は溝１から古曽部焼を含む大量の陶磁器類が出土した。古曽部焼は高槻市古曽部町で寛政年間（18世紀末）～大正元年（1912）までの約120年間、茶器や日用雑器を中心に生産していた小規模地窯である。１は高台内に「古曾山」の印をおす茶椀であ

る。21はきゅうすの取手部分に「古曾山」と刻印がある。これらは印からみて、嘉永4年(1851)に没した2代目の五十嵐新平の作品と考えられる。

今回の調査では、包含層を確認したものの中世以前の遺構は後世の溝による攪乱のため検出できなかった。しかしながら、近世～近代にかけて古曽部焼がこの地域に普遍的な日用雑器として使われていたことが確認できた。

（北原）

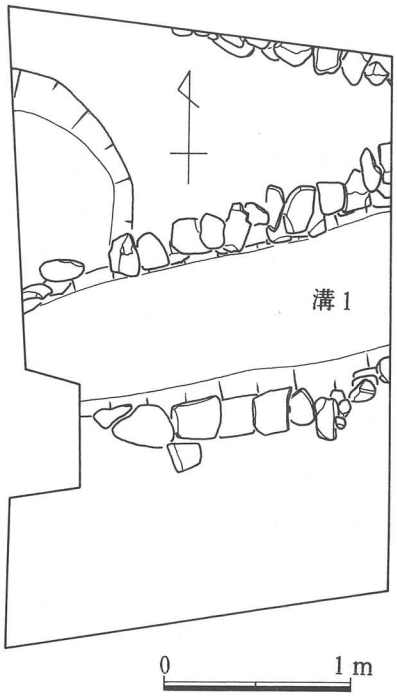


図27. 芥川遺跡　平面図

Ⅸ. 安満遺跡

27. 安満遺跡（90－1）の調査

高槻市安満東の町427－6・8・9番地にあたり、小字名は森本と称する。現状は宅地である。今回の調査地は安満遺跡の北東部に位置し、これまでの調査からみて遺構の希薄な地域にあたっている。

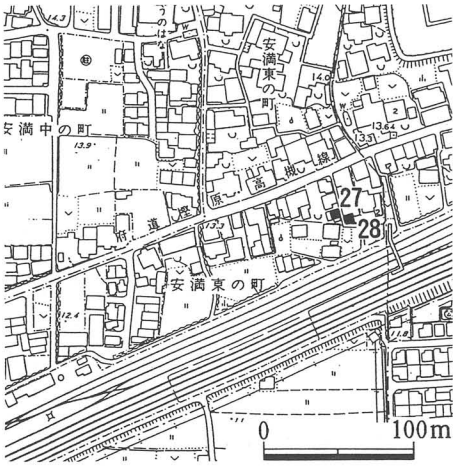


図28. 安満遺跡の調査位置図

調査は届出地の中央部に2m×2.2mのトレンチを設定し、重機を使用して表土を除去した後、人力で地山面まで掘り下げて遺構の精査をおこなった。層序は盛土・整地土（0.25m）・暗茶褐色土（0.4m）・青灰色砂質粘土（0.1m）・暗灰色粘土〔地山〕である。明確な包含層は認められなかった。トレンチ南側では暗灰色粘土を切って暗灰褐色粘土の堆積が認められる。地山の

傾斜から判断して西に流れる自然流路であろう。遺物は青灰色砂質粘土層より若干の土師器片が出土した。（北原）

28. 安満遺跡（90－2）の調査

高槻市安満東の町乙428番地にあたり、小字名は森本と称する。現状は宅地である。個人住宅の新築工事が計画されたため、事前に発掘調査を実施した。

今回の調査地は、本遺跡の北辺部にあたり、遺構の分布が希薄な地域である。調査は届出地がすでに厚い盛土が行われていることが予測されたため、中央部西側に東西1m、南北2mのトレンチを設け、小型ユンボを使用して層序の観察と遺構の確認をおこなった。層序は盛土（0.5m）・耕土（0.3m）・青灰色土層〔地山〕である。今回の調査区内は狭小なこともあり、遺構・遺物はまったく検出することができなかった。（大船）

Ⅹ. 梶原寺跡

29. 梶原寺跡の調査

調査地は高槻市梶原一丁目382－1番地にあたり、小字名は梶ノ木と称する。西国街道の南側約20mに位置し、北方約100mでは奈良時代の大型掘立柱建物を検出している。付近は西国街道とJR東海道本線がもっとも近接しており、当該地南側一帯は線路敷まで約20mの間が一段低い水田となっている。

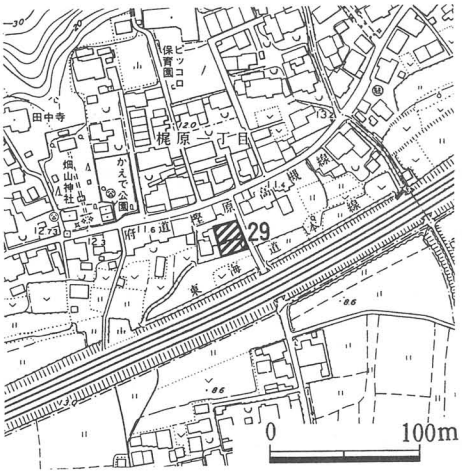


図29. 梶原寺跡調査位置図

調査は、届出地に東西に調査坑を設定し、人力で掘削して遺構を精査した。基本的層序は、黒褐色土［盛土］0.4～0.55m・暗茶褐色礫土0.35m・淡褐色粗砂（西側の一部）0.4m・黄褐色礫土［地山］となり、地山面の標高は約8.9mをはかる。調査坑東

半部は地山面まで攪乱を受けていた。

調査の結果、遺構・遺物とも全く検出されず、湧水や地山面の状況からみて調査地は埋没谷にあたると判断された。（鐘ヶ江）

Ⅺ. まとめ

今年度は嶋上郡衙跡で16件、その周辺地域で13件の発掘調査を実施した。

嶋上郡衙跡の北側に位置する７－Ｏ地区では11世紀前半頃の井戸を調査した。これは横桟縦板組み構造をもち、調査地周辺では24地区や郡家今城遺跡で類例がみられる。

また、井戸から出土した黒色土器は三島地域から出土する和泉型瓦器椀と共通する要素が多く見られ、黒色土器の相互の関係や瓦器との接点を解明するうえで好資料を提供することになった。

同じく35－Ａ・Ｅ・Ｉ・Ｍ地区では芥川廃寺に関連する遺構をはじめて発見した。これまで芥川廃寺では伽藍に直接かかわるまとまった建物遺構はみられず、わずかに瓦溜などを検出するのみであった。そして瓦の出土範囲や自然地形などから伽藍の東・北縁を推定し、また嶋上郡衙跡との位置関係からその南限を想定①していたにすぎない。今回の調査で検出した梁行１間で東西方向に延びる建物は、回廊の可能性が高いものであった。もしこれが回廊ならば伽藍中枢部の南限を確定することができることになる。また、周辺地区の現在までの調査成果から総合的に判断すれば、芥川廃寺の伽藍主要部は史跡指定地内にうまくおさまることになってきた。遺物では、瓦溜から出土した資料の分析から白鳳～奈良時代にかけての軒瓦の変遷があきらかになった。そしてこれまでに判明している平安時代の資料を加えて、白鳳～平安時代にわたる芥川廃寺の変遷をたどることができるようになった。これは遺物からも寺の消長をうかがえることを示し、遺構・遺物の両面から幻の寺を具体的に述べることが可能となった意義は大きい。今後は芥川廃寺の面的なひろがりを把握するためにも周辺地域で慎重な調査が肝要になってくる。

郡家今城遺跡では４棟の掘立柱建物跡を検出した。これらの柱列方向は磁北に対して15.5～18度東に振っていた。高槻市ではこれまでの調査で掘立柱建物の軸方向が時

代がくだるにつれて東へ振り、17～20度前後振った9世紀後半頃には大きく西へ振りもどすことが判明している。それによって遺物の出土しない建物でもその時期を推定することが可能となり、今回検出した建物の時期の下限は9世紀後半頃とすることができた。建物の規模についてみると、郡家今城遺跡で検出した奈良・平安時代の掘立柱建物は100棟をこえ、その半数以上が梁行2間×桁行3間となっている。そのなかで今回検出した桁行5間の建物は、これまで6棟しか見つかっていない。そして、柱間も2.4m（八尺）等間としているなど、集落内の中心的な建物のひとつとみることができる。今回の調査地は郡家今城遺跡の集落が拡大・発展するなかで登場してきた有力者層の屋敷地であったとかんがえられよう。

前塚古墳では後円部盛土の状況を知ることができた。墳丘はまず表土とその直下の地山土を積みあげた上に、厚さ1m前後を1単位とした盛土層を6単位確認した。この単位は石棺の出土地点から判断して合計7単位分あったとみられ、後円部の高さはくびれ部付近の基底部から約8mの数値を得られた。1m前後の単位で土を積み上げていく方法は弁天山C－1号墳や百舌鳥大塚山古墳など、おもに前期～中期の古墳でみられる。これらの古墳は墳丘外周部に小山をつくりこれを内側に向かって拡張していくのに対して、前塚古墳では中心から外側に向かって盛土をおこなっていた。この両者における盛土作業のちがいは今後の調査によって解明していかねばならない。

塚脇古墳群ではあらたに発見した塚脇F－1号墳を調査した。この古墳は直径20mの円墳で内部主体は右片袖の横穴式石室である。石室内からは土器類やガラス小玉のほか鉄地金銅張の馬具類が出土している。石室の平面形態や出土遺物からみて同古墳群中でも最古の部類に属すとかんがえられ、有力者の墓と想定するにふさわしい内容である。また、墳丘には石垣状に積みあげられた石列が巡る。このような石列は山城西北部・丹波・但馬地域などの後期古墳にみられるが、同墳の場合は石室周囲と墳丘裾に巡るなど先の地域の古墳とは性格が異なるようである。いずれにせよ、本市はもちろん大阪府でもはじめての検出例であり、豪華な副葬品とともに塚脇古墳群の成立過程やその性格をかんがえるうえで貴重な資料を提供したといえよう。

なお、嶋上郡衙跡の史跡指定地南側、55－C・G地区では奈良～平安時代にかけての梁行3間以上（5.7m以上）×桁行6間（17.6m）の大型の掘立柱建物を検出している。これと同じ間数の建物は郡衙の北側で1棟検出しているが、規模は今回の建物には及ばない。本調査区は郡衙・芥川廃寺と隣接し、かつ山陽道に南面する位置にあ

ることや、建物規模の大きさからみて官衙遺構としても過言ではない。また、西側隣接地では整然と並ぶ倉庫群を検出する②など調査区周辺はより慎重に取り扱う必要がある。また嶋上郡衙のありかたについても今後再検討する必要があろう。

（宮崎）

注

① 森田　克行　「嶋上郡衙跡新期郡庁院の推定復元」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・9』高槻市教育委員会　１９８５

② 鐘ヶ江一朗　「45－Ｊ・Ｋ・Ｎ・Ｏ地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・11』高槻市教育委員会　１９８７

XII．芥川廃寺出土の瓦について（報告と若干の予察）

森　田　克　行

1．はじめに

芥川廃寺推定地内にあたる嶋上郡衙跡35－A・E・I・M地区の調査で出土した瓦類について報告する。瓦は瓦溜・柱穴・落ち込みなどの遺構および包含層からかなりの量が出土している。種別としては軒丸瓦・軒（隅）平瓦・丸瓦・平瓦があり、遺構ごとに順次記述する。なお瓦溜では遺物収納箱で約10箱分（約700点）の瓦を検出したが、当該遺構の残余が調査区域外にも及んでいることから、今回は分類した成果のみを記し、統計処理などについては後日に期したい。

2．軒丸瓦

瓦　溜

ＩＡ類……素縁複弁８葉蓮華文の瓦当文を有するもので、１点のみ出土している。１は中房を欠くものの蓮弁の様子や瓦当径（16.6cm）から、芥川廃寺の創建瓦と目されているものである。これまでの資料によると、不揃いの蓮子が１＋６＋10とやや乱雑に配された中房がおさまる。この類型には周縁の鋸歯文帯がみられないが、川原寺式の系統であるのは明らかである。丸瓦部は瓦当に比べて薄く感じられる。色調は暗灰色ないし灰色で、胎土は精良だが、軟質である。

ＩＢ類……同じく素縁複弁８葉蓮華文の瓦当文をもつものだが、周縁は太い突線帯の外側に平縁を有している。２は断片であるが、周縁の特徴からＩＢ類に特定できる。

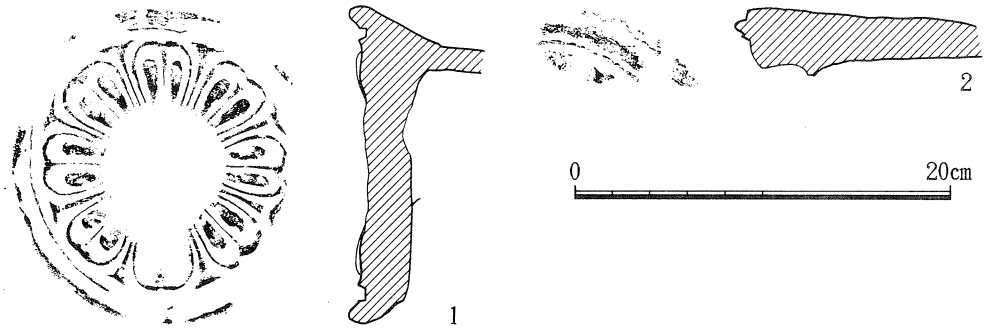


図30．瓦溜　軒丸瓦　ＩＡ類(1)　ＩＢ類(2)

中房には１＋８の蓮子を配したものと推察される。胎土には砂粒を多く含み、色調は茶灰褐色を呈する。

３．軒平瓦

瓦　溜

Ⅰ類……重弧文系のものを一括している。芥川廃寺ではこれまでにＩＡ類（四重弧文）・ＩＢ類（三重弧文）・ＩＣ類（二重弧文）の３種を確認しているが、今回の瓦溜から出土した資料はＩＡとおもわれるもの１点（３）とＩＢ類が２点（４・５）であ

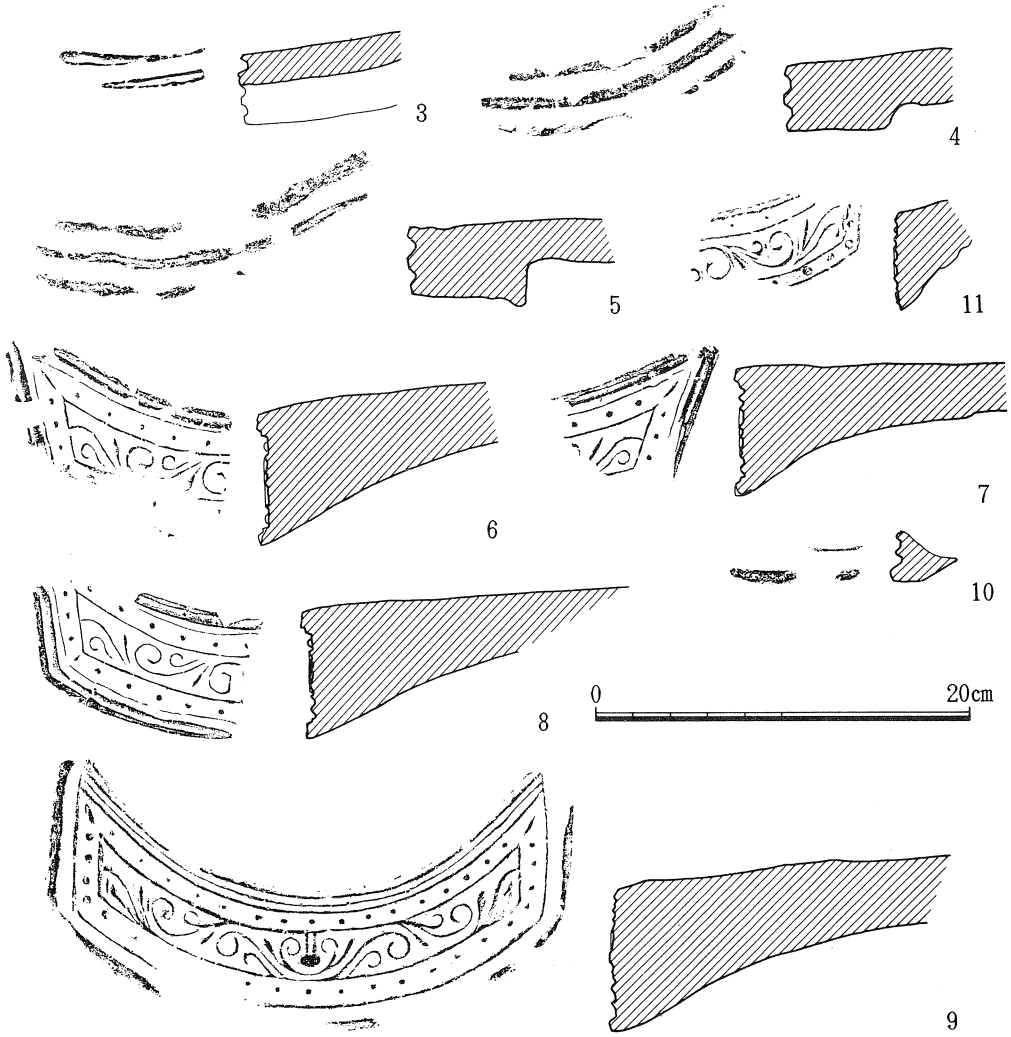


図31. 瓦溜　軒平瓦　ＩＡ類（３）　ＩＢ類（４・５）
ⅡＢ類（６・７）　ⅡＣ類（９・10）　ⅡＤ類（11）　軒隅瓦ⅡＢ類（８）

る。3は顎部を欠失しているが、剝離痕からみると8㎝以上になる。瓦当面のヘラ彫り線は向かって左から右へひかれている。色調は淡灰褐色を呈する。胎土は精良で、やや軟質である。4・5は顎の深さが6㎝前後とやや浅い。ヘラ彫り線は3と同様、左から右へひかれているが、2点とも胎土に砂粒を多く含み、3とは明らかに異なっている。こうしたことからすると、ⅠA類は軒丸瓦ⅠA類と、ⅠB類は軒丸瓦ⅠB類と組み合う可能性が高い。4は黒灰色、5は淡褐色を呈している。

ⅡB類①……平城宮跡の6664型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦である。3点（6～8）出土したなかの1点（8）は側面が鋭角（約60°）にそがれていて、軒隅瓦と考えられる(図版第13－8′)。なおこのⅡA類については、これまでに判明している資料を含めて、上外区の珠文数が16に確定でき、しかもすべてが曲線顎の形態をとるなど、単一の型式で成立していたと判断されるようになってきた。平瓦部の凹面はていねいにナデ調整し、凸面には横方向の縄目タタキをほどこすものが多い。6・8の平瓦部凸面には、ベンガラがわずかに付着している。いずれも焼成は堅緻で、胎土は精良である。

ⅡC類……ⅡB類同様、平城宮跡の6664型式を祖型とする均整唐草文軒平瓦であるが、実際的には先記したⅡB類から派生したものであろう。瓦溜からは2点（9・10）出土しており、ともに曲線顎である。9は瓦当文の全容が判明する芥川廃寺での唯一の資料で、顎部ちかくにはベンガラがわずかに認められ、実際に堂宇に葺かれていたことがわかる。瓦当文の特徴としては、中心飾りの頭部がベタに彫り込まれていることや上側の周縁が3本の突線になっていることである。かつて、この類型が播磨金剛山廃寺の軒平瓦と同**笵**であると指摘されていたが、上記の3本の突線や外区圏線の有無から異**笵**と判断される。いずれにしても、きわめて親近性をもつことに変わりはなく、同じ系列の工房で作出されたものであろう。9・10はどちらも灰白褐色を呈し、やや軟質。

ⅡD類……平城宮跡の6664ないし6666A型式の系譜上にある均整唐草文軒平瓦である。11は**笵**ずれがみられるものの、芥川廃寺ではいまのところこの1点のみ。顎の形態は不明。色調は灰色で、やや軟質。

落ち込み

ⅠB類……12の1点が出土している。顎の深さは6㎝を測り、瓦当面は左から右の方向にヘラで彫り込んだのち、突部をヘラナデ調整している。平瓦部には左まわりによ

る粘土板の接合部が認められる。凹面には布目（10本×11本/cm）と模骨痕がみられ、凸面はていねいにナデ調整している。顎の下面にはナデつけたときの指紋の痕が顕著にみられる。また顎の一部から平瓦部にかけて、横方向にベンガラが付着しており、瓦当の出はおよそ12cmであったことが知られる。色調は淡茶褐色を呈し、焼成は堅緻。

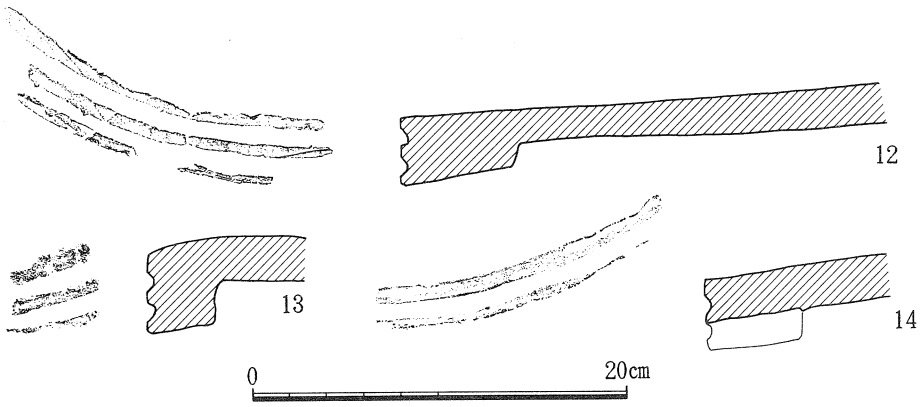


図32. 落ち込み 軒平瓦ＩＢ類（12） 柱穴３ 軒平瓦ＩＢ類（13） 包含層 軒平瓦ＩＢ類（14）

柱　穴３

ＩＢ類……13の１点が出土している。この類型としては顎が浅く、瓦当面のヘラの彫り込みは右から左の方向である。色調は淡灰色を呈し、胎土には砂粒をかなり含んでいる。

包含層

ＩＢ類……14は顎部を欠失している。瓦当面は右から左へヘラで彫り込んだのち、ナデ調整されている。平瓦部の凹面には糸切り痕・模骨痕・布目（12本×10本/cm）が観察され、凸面はナデ調整している。色調は淡黄褐色で、胎土は砂質の度合いが強い。

４．丸瓦

瓦　溜

丸瓦はいわゆる玉縁式と行基式が認められる。玉縁式（図版第14）はさらに厚手で大振りの一群（16・17）と薄手で小振りの一群（15・18～27）に分けられるが、前者はあまり目立たず、大半は後者である。前者（16・17）の全長は明らかでないが、復元幅14～15cm・玉縁長６cmを測り、玉縁は尻部にいくにしたがい下がっている。凸面は縄目タタキをほどこしたのちナデ調整して仕上げているが、タタキ痕が看取される。

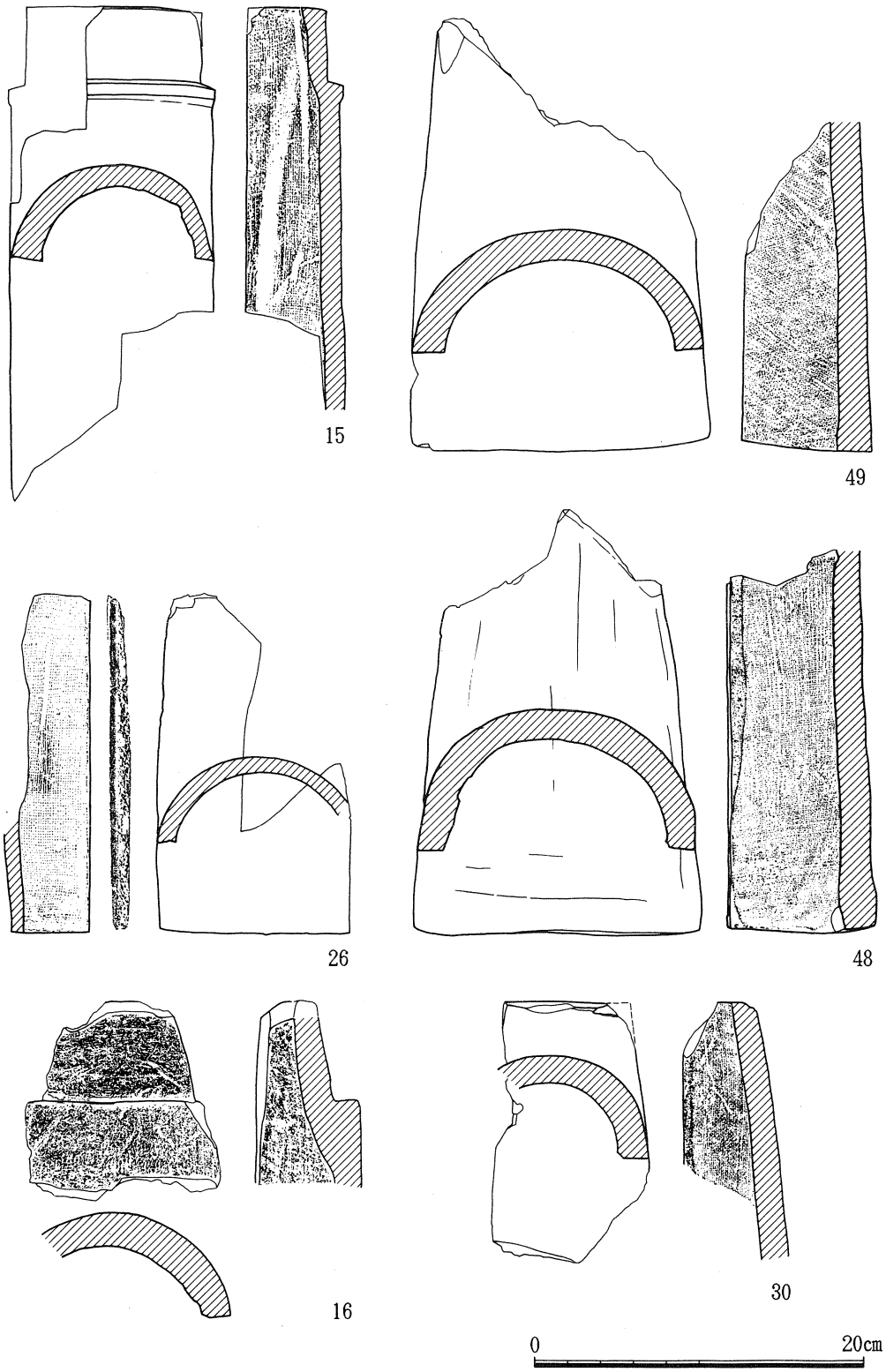


図33. 瓦溜 丸瓦（15・16・26・30）　落ち込み 丸瓦（48・49）

色調は淡茶灰色ないし淡灰褐色を呈している。なお17については胎土に砂粒を多く含み、混入品の可能性がある。後者についても全長は明らかでないが、15のように幅12.3cmとやや小さくつくられている。玉縁も4.4cmとすこし短かめで、その取り付け方も筒部に平行になっているなど、前者とは異なっている。凸面は縄目タタキをほどこしたのち、ていねいにナデ調整しており、タタキ目はわずかに観察できる程度である。またこの一群の丸瓦には21′や26′にみられるように半截線が明瞭に観察され、半割面をヘラ削り調整しないことが製作技法上の大きな特徴となっている。色調は灰色ないし暗灰色で、胎土は精良である。

行基式（図版第15）は丸瓦全体の１割にも満たない。厚さは1.5cm（29）から2.4cm（28）とばらつきがあるが、おおむね厚手のもので占められている。凸面のナデ調整は入念におこなわれていて、タタキ痕はほとんど観察できない。また半截部のヘラ削り調整もていねいで、玉縁式の薄手の一群のように半截痕をのこすのもはない。色調は淡灰褐色ないし淡褐色系統で、暗灰色系のものは少ない。

落ち込み

丸瓦は２点（48・49）とも行基式で、どちらも尻部を欠失している。凹面には糸切り痕と布目（11本×10本/cm）がみられ、凸面はていねいに板ナデ調整するなど、よく似た形状を示しているが、48には半割部凹面側にヘラ削り調整がみられる。胎土は砂粒を多く含むものの、焼成は良い。

５．平瓦

瓦　溜

平瓦は破片ばかりで全形の判明するものはない。いずれも凹面に布目と模骨痕が明瞭にのこるものの、製作技法的には桶巻き作りと一枚作りのものが混在している。さらにこれらは凸面にみられるタタキ板原体の種類や調整の度合いによって、いくつかに分類できる。

凸面の全面をナデ調整する平瓦（36・39・40など）は、全体の約４分の３を占める主要なものである。調整はおおむね横方向にほどこすが、縦方向のものも若干認められる。色調は灰白色・灰褐色・黒灰色・暗青灰色など様々である。

タタキ板の痕跡をのこすものは全体の約４分の１で、格子目を刻んだものと縄を巻きつけたのがある。格子目は浅く幅広い界線による細かなもの（５目/３cm）で、確

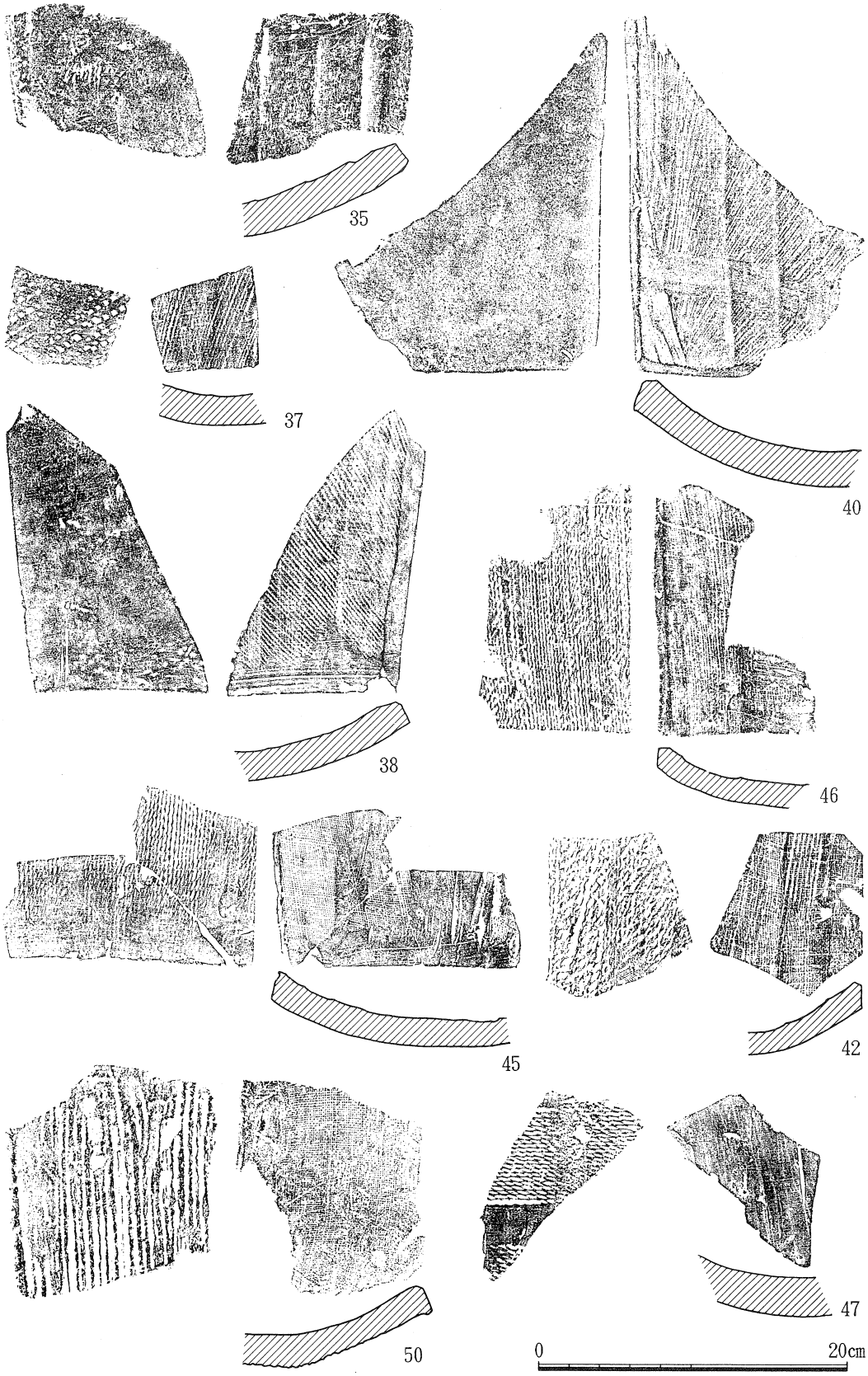


図34. 瓦溜 平瓦（35・37・38・40・42・45・47） 包含層 平瓦（50）

認できたものは3点（37・38など）にすぎない。それも38などはその痕跡がわずかに確かめられるだけで、大半の部分はナデ調整によってスリ消されている。縄目は全般的に細かく（9～12条/3㎝）で、縄目の方向に縦・斜め・横の3種がある。もっとも多いのは縦方向にほどこしたもの（42～46など）で、この一群が一枚作りのものとみられる。ついで斜め方向のもの（41など）が少量あり、横方向のものは数点（47など）みられる。縄目タタキをほどこしたものは、通常その全面に痕跡をのこすが、なかには35のようにていねいなナデ調整によってスリ消したものがまれにみられる。また横方向にほどこしたもので、その凹面をていねいにナデ調整している類（47）については、上記したように軒平瓦ⅡB類の平瓦部と考えられる。色調については、格子目のものが灰色ないし灰褐色、縄目のものはそれらに加えて暗灰色や黒灰色が目立っている。

包含層

包含層からも多くの平瓦が出土しているが、大要が瓦溜の状況にちかいものと考えられる。ここでは平安時代の平瓦についてのみ報告しておく。平瓦（50）は凹面にやや粗い布目をみるが、模骨の痕跡は観察されず、1枚作りと考えられる。また凸面にみられる縦方向の粗い縄目タタキ痕（7条/3㎝）は、芥川廃寺瓦窯の製品と一致し、この平瓦が平安時代中期にまで降ることが判る。色調は暗灰褐色を呈する。胎土は良質ながら、小石粒をかなり含んでいる。

6．まとめ

芥川廃寺の屋瓦については、藤沢一夫氏が海会寺式亜式芥川廃寺式として触れたのが嚆矢②で、その後に島谷稔氏の総括的な研究③があった。最近ではトレンチ調査による丸瓦・平瓦のデータ集積④や瓦窯の調査⑤によって、白鳳時代から平安時代にいたる変遷が徐々に明らかになってきている。今回、そこに瓦溜の資料が加わることになり、芥川廃寺前半期の資料がさらに充実することになった。ここでは本調査区での概要をまとめ、若干の見通しを記しておくことにする。

まず瓦溜であるが、軒丸瓦は複弁系のⅠA類・ⅠB類が白鳳期、軒平瓦は重弧文系のⅠ類が白鳳期、唐草文系のⅡB・ⅡD類が平城宮Ⅱ期以降（おそらく平城宮Ⅲ期併行）、そしてⅡC類についてもⅡB類に直続するとみられることから、奈良時代の中頃までの瓦類が混在している状況である。瓦溜が形成された時期については、芥川廃

寺でかなり認められる『西寺』銘の平瓦やそれに伴う模骨痕のみられない一枚作りの平瓦がまったく見い出せないことからすると、平安時代前期にまでくだることは考えられず、奈良時代後半というのが妥当な見解となろう。

丸瓦については、観察の項で一定分類はしたものの、軒丸瓦との対応がいまひとつ不分明なため形式認定までは及ばなかった。島谷氏の論考では、本稿でいう軒丸平ⅠA・ⅠB類には行基式の丸瓦が付くとの記述があり、その行間からは行基式丸瓦をことさら白鳳期に求めているような姿勢がうかがえる。現実には、これらの軒丸瓦はいずれも瓦当部のみの出土であり、丸瓦部を行基式と明示する資料はみられない。もちろん今回報告した落ち込みのように白鳳期の行基式丸瓦は厳然と存在するわけであるが、一方では芥川廃寺瓦窯のように平安時代中期にも行基式丸瓦がみられるのも事実である。前稿④包含層資料（白鳳期～平安時代）で算出した数値と芥川廃寺瓦窯⑤（平安時代中期）で算出した数値、および今回の瓦溜（白鳳～奈良時代）でのおおまかな数値を比べてみると、白鳳期から平安時代まで行基式が丸瓦全体の10％前後の比率で推移しているのが指摘できるのである。このことは芥川廃寺の一画に創建時から廃滅にいたるまで行基葺きの建物が連綿と営まれていた可能性を示している。

平瓦についても、丸瓦と同様、分類だけにとどめた。すでに記したように、この瓦溜は白鳳期から奈良時代にいたる資料であり、平瓦には桶巻き作りのものと一枚作りのものが混在していた。形式的な序列としては、凸面をていねいにスリ消す一群→斜め方向にタタキ痕（格子目・縄目）をのこす一群→縦方向にタタキ痕（縄目）をのこす一群、ということになるが、これらがどのような比率で推移するのか、あるいは変遷の画期というものもまだ充分に把握できていない。このなかでは、前２者が桶巻き作り、後者が１枚作りと判断されるものであったが、芥川廃寺において桶巻き作りから一枚作りへの転換がいつ頃であったのか判然としない。ただ一枚作りの平瓦は全体の４分の１に満たない程度であるから、奈良時代の当初から一枚作りがおこなわれていた可能性は少ないとおもっている。もっとも『西寺』銘瓦にともなう平瓦や芥川廃寺瓦窯の平瓦の凹面には模骨の痕跡がみられず、奈良時代と平安時代の一枚作りの平瓦では凸型成形台の枠組構造が異なっていたことは確実で、凸面の縄目の粗密とも相俟って、その区別は小片でも容易である。

芥川廃寺の屋瓦は、これまで採集品と部分的な発掘調査で得られた資料をもとにそ

の様相をうかがってきたが、今回はじめて明確な瓦溜遺構を調査し、一定の見通しがもてるようになってきた。とくに軒瓦については既存の資料と対比した結果、あらたに確認できたのは1形式（ⅡC類）1点であった。そこで芥川廃寺様式として分別できる軒瓦について第Ⅰ様式から第Ⅲ様式まで大きく区分してみた。第Ⅰ様式は川原寺式軒丸瓦の系統に属しながら鋸歯文を欠く創建瓦（ⅠA類）とその系譜下にある複弁蓮華文のⅠB類・ⅠC類および重弧文系軒平瓦からなる。第Ⅱ様式は平城宮系の複弁蓮華文・重圏文軒丸瓦・唐草文軒平瓦からなり、第Ⅲ様式については芥川廃寺瓦窯の細弁蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦をあてるものとする。なおこのほかにも『西寺』銘瓦・法相華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦⑥など平安京の瓦が認められる。

このなかで平安京系の各類は出土点数も限られ、また『西寺』銘瓦のように牧野瓦窯の製品と推定されるものが含まれるなど、すべてが搬入品と考えられるものである。これまで芥川廃寺の瓦窯としては第Ⅲ様式だけが確認されているが、第Ⅰ様式でも創建軒丸瓦（ⅠA類）からⅠB類・ⅠC類と芥川廃寺独自の形式が展開しており、ちかくに当該様式の瓦窯の存在を示唆している。さらに第Ⅱ様式の軒平瓦ⅡB類については、以前に平城宮・難波宮・吹田市七尾瓦窯の6664の諸型式がすべて段顎であることから、一定使用された**笵**木が持ち込まれたと考えたことがあるが、それらの諸形式には上外区の珠文数が16になるものはみられず、やはり芥川廃寺用としてあらたに供されたものなのであろう。このことは軒平瓦ⅡB類の瓦当文が極めてシャープで、**笵**の傷みがほとんどみられないことなどからも支持される。またこのⅡB類に引き続いて展開するⅡC類はさらに独創性が加味されており、これも地元でつくられたと考えるのが賢明である。

要するに芥川廃寺様式の屋瓦は、創建以後第Ⅲ様式まで、特定の瓦工房から断続的に供給されていた可能性が高いとみられるのである。おそらくその生産体制は第Ⅲ様式の瓦窯のように、けっして大規模なものではなく、供給範囲もごく限られたものであったとおもわれる。とくに今回、軒平瓦ⅡC類が播磨金剛山廃寺とのあいだの同**笵**関係が否定され、芥川廃寺瓦工房の供給範囲がそれほど広くなかったと考える筆者には都合がよい。将来、調査が進捗し、芥川廃寺とこの生産規模の小さい工房との需給関係が整理されれば、地域に根ざす「郡寺」のあり方を説き明かすうえにおいて恰好の材料を提供することになるだろう。

芥川廃寺は伽藍の配置も判然とせず、その名称すら明らかでない。今回の調査で検

出した建物遺構は芥川廃寺の伽藍をうかがう糸口をはじめてあたえてくれたし、出土した瓦類は今後の本格調査や整備にむけての判断基準を用意した。そうしたことから本稿ではひとつの試みとして芥川廃寺の軒瓦を３つの様式と平安京の搬入瓦とに分けてみた。これらの具体相については、丸瓦・平瓦をも含め、いずれ機会をみつけて考究したいとおもっている。

注

① ⅡＡ類については、③の文献で紹介されている均整唐草文軒平瓦43を充てる。

② 藤沢　一夫　1941「摂河泉出土古瓦の研究　－編年的様式分類の一試企－」『考古学評論』第三輯

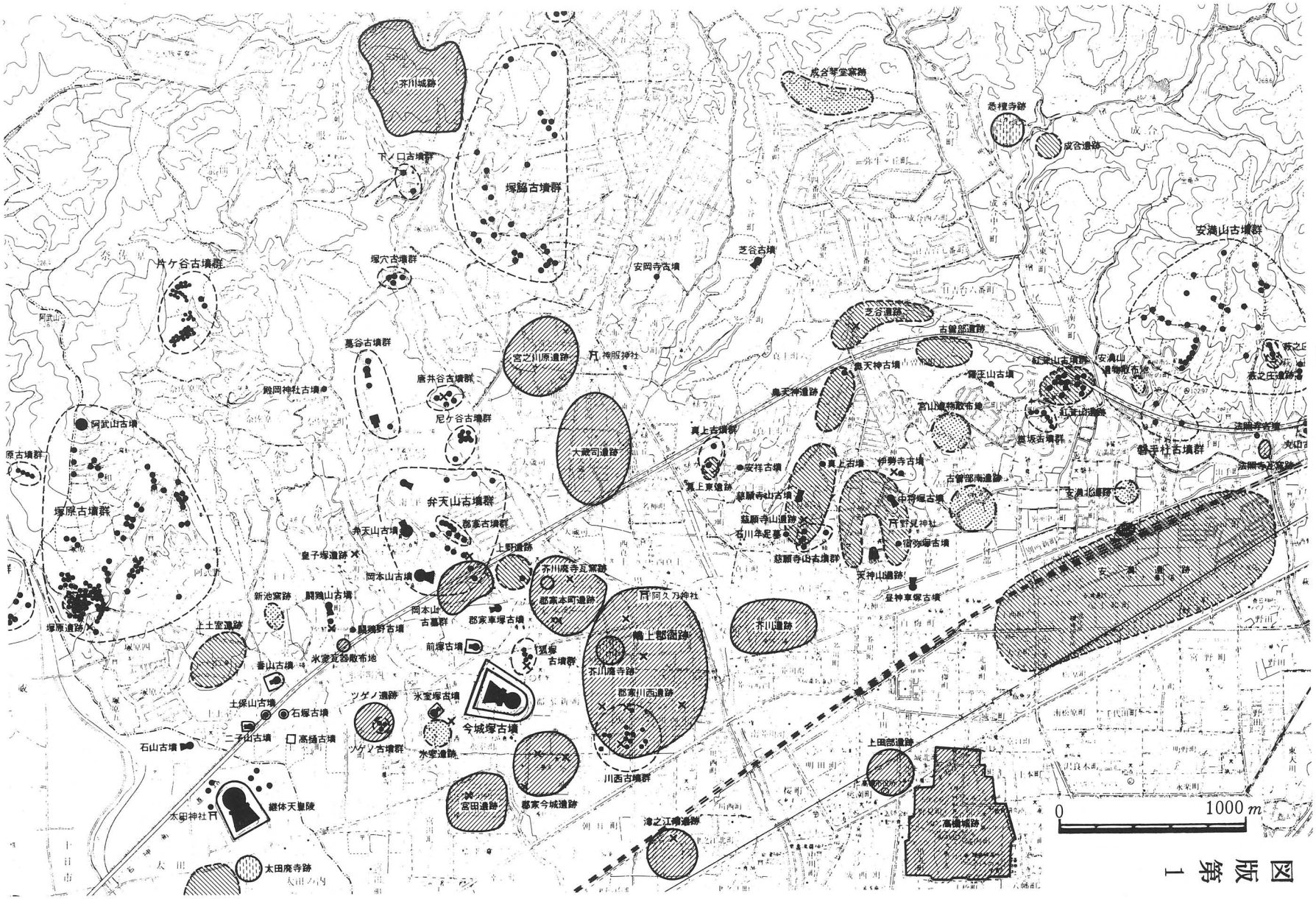
③ 島谷　　稔　1977「摂津芥川廃寺の研究　－高槻上代寺院跡の研究（二）－」『大阪文化誌』第３巻第１号　大阪文化財センター

④ 森田　克行　1983「1.24－Ｈ・Ｌ、25－Ｍ・Ｏ・Ｐ地区の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・７』高槻市教育委員会

⑤ 森田　克行　1985「Ⅱ．芥川廃寺瓦窯跡の調査」『嶋上郡衙跡他関連遺跡発掘調査概要・９』高槻市教育委員会

⑥ ③などで法相華文軒平瓦と呼んでいたもの。

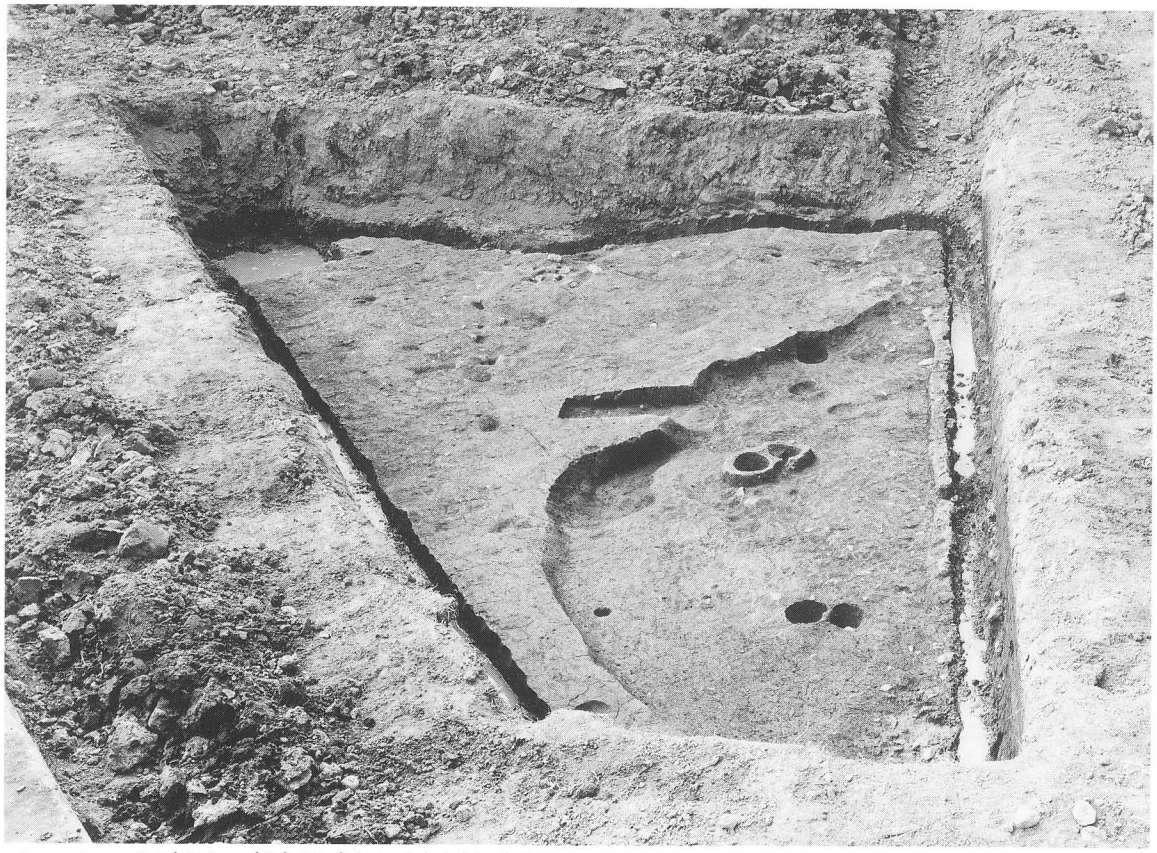
図　版


芥川城跡
成合琴室窯跡
悉檀寺跡
成合遺跡
下ノ口古墳群
塚脇古墳群
安満山古墳群
片ケ谷古墳群
塚穴古墳群
安岡寺古墳
芝谷古墳
芝谷遺跡
古曽部遺跡
墓谷古墳群
宮之川原遺跡
神服神社
鳥天神古墳
鳥天神遺跡
紅葉山古墳群
安満山
唐井谷古墳群
殿岡神社古墳
尼ケ谷古墳群
宮山遺物散布地
紅葉山遺跡
法隆寺古墳
阿武山古墳
真上古墳群
大蔵司遺跡
真上古墳
伊勢寺古墳
安祥古墳
真上東遺跡
慈願寺山古墳
中将堀古墳
古曽部南遺跡
安満北遺跡
塚原古墳群
弁天山古墳群
部家古墳群
慈願寺山遺跡
石川年足墓
宿弥塚古墳
弁天山古墳
上野遺跡
皇子塚遺跡
岡本山古墳
芥川廃寺瓦窯跡
慈願寺山古墳群
灰神山遺跡
安満遺跡
新池窯跡
鶏鳴山古墳
部家本町遺跡
阿久乃神社
岡本山古墳群
部家車塚古墳
塚原遺跡
上土窯遺跡
鶏鳴野古墳
嶋上郡衙跡
芥川遺跡
前塚古墳
氷室瓦器敷布地
孤塚古墳群
善山古墳
芥川廃寺跡
部家川西遺跡
ツゲノ遺跡
氷室塚古墳
土保山古墳
石塚古墳
今城塚古墳
二子山古墳
高槻古墳
ツゲノ古墳群
氷室遺跡
石山古墳
川西古墳群
上田部遺跡
継体天皇陵
宮田遺跡
部家今城遺跡
太田神社
津之江廃遺跡
高槻城跡
太田廃寺跡
0
1000 m

図版第1

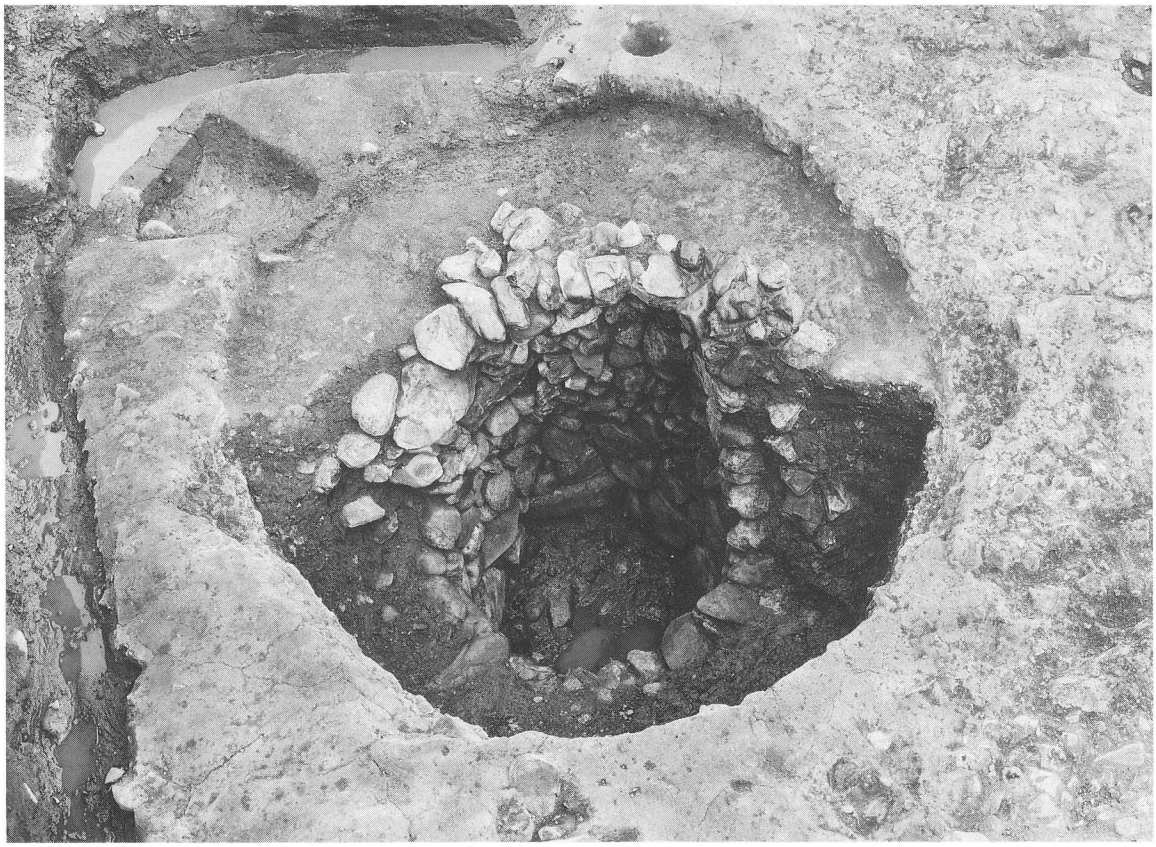
図版第2

a．７－Ｏ地区　西半調査区（東側から）



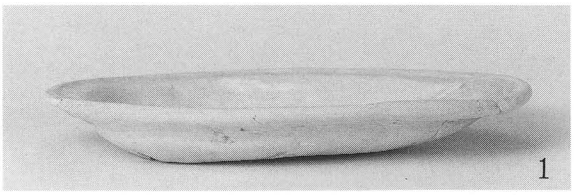
b．７－Ｏ地区　東半調査区（東側から）

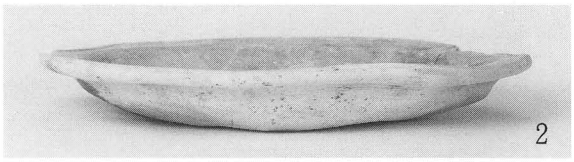
a．７－Ｏ地区　井戸１（南側から）

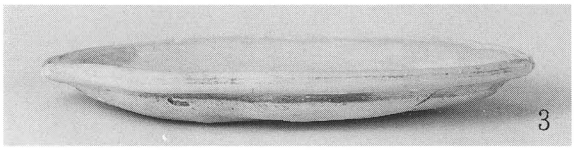


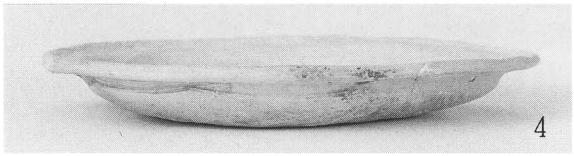
b．７－Ｏ地区　井戸２（北側から）

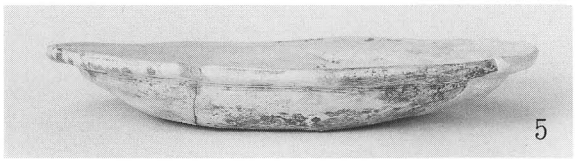
図版第4


1


2


3


4


5

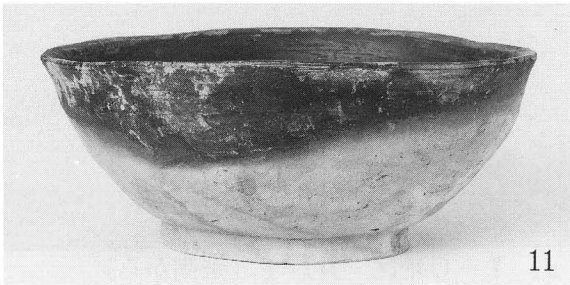
6

7

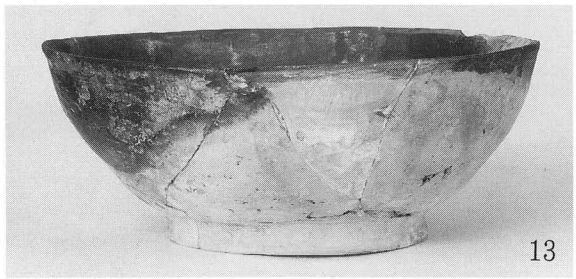
8

9

10


11

12


13

14

7－O地区　井戸1（1～14）

15

16

17

18

19

20

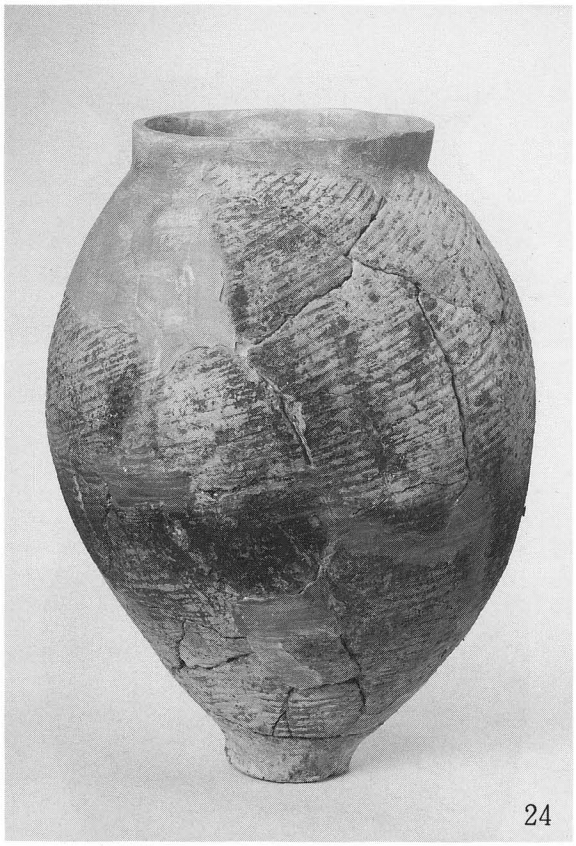
21

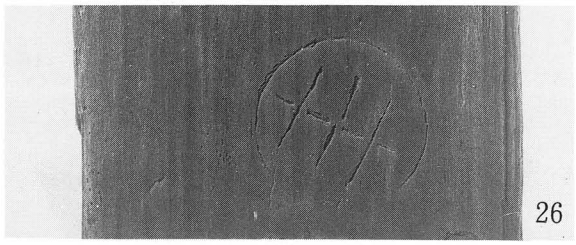
22

23

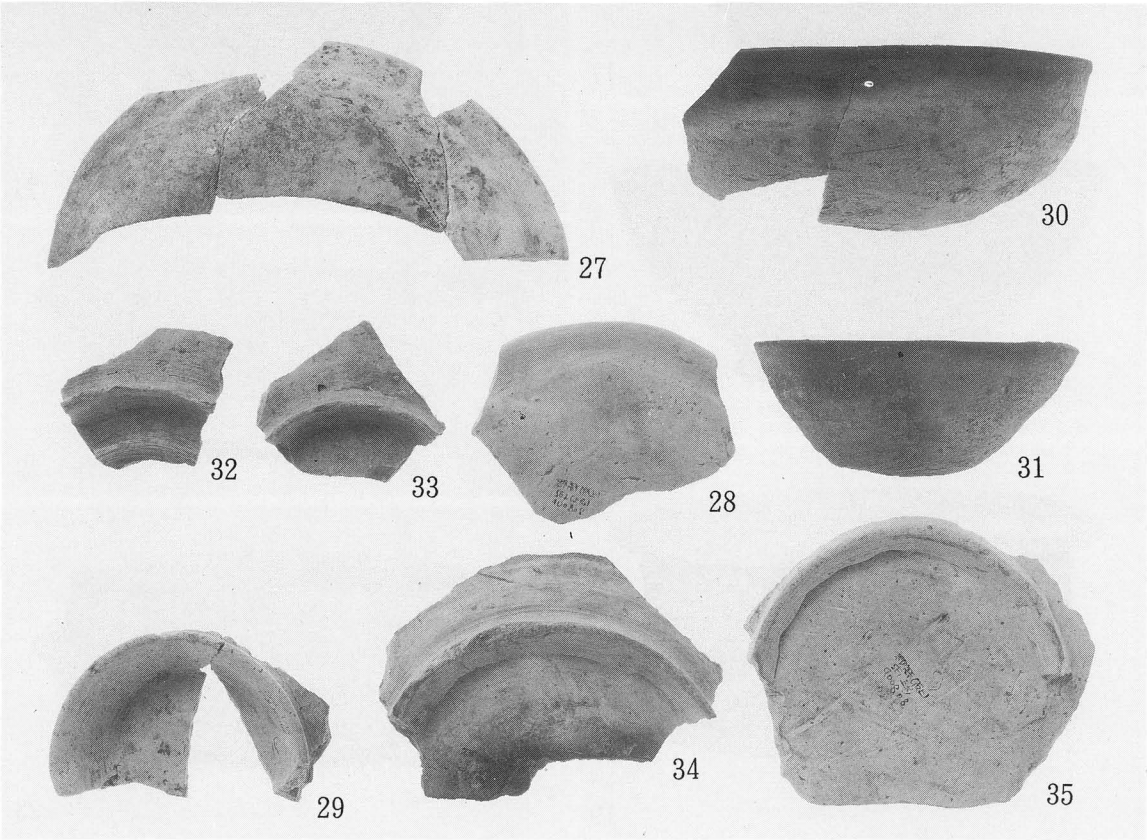
7－O地区　井戸1（15～19），包含層（20～23）

図版第6



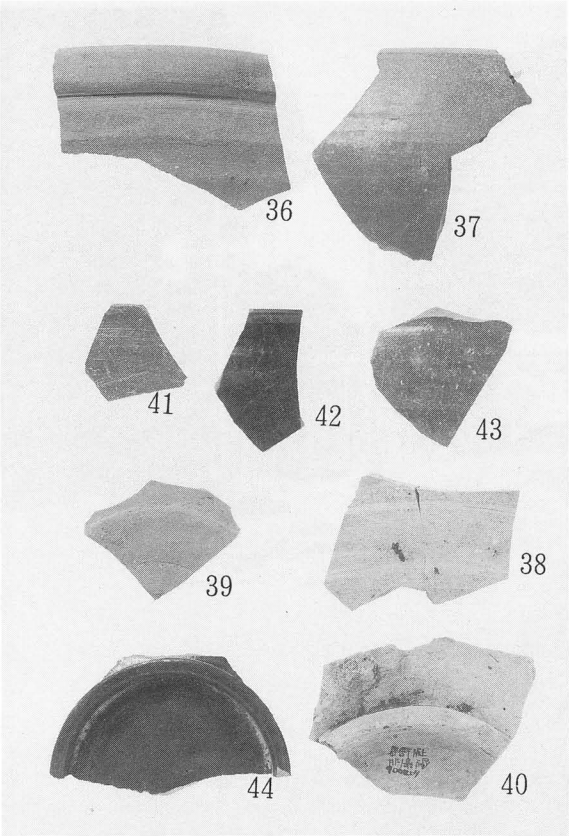


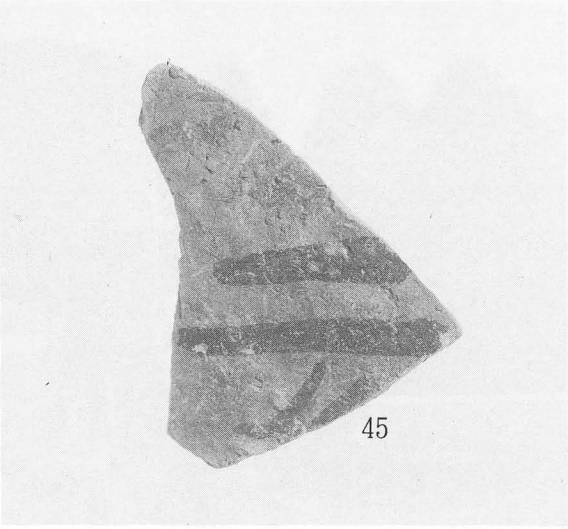
a．7－O地区　包含層（24・25），井戸1（26）

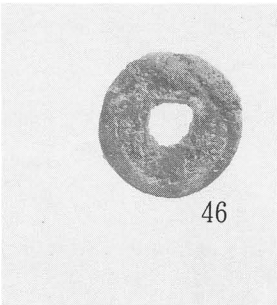


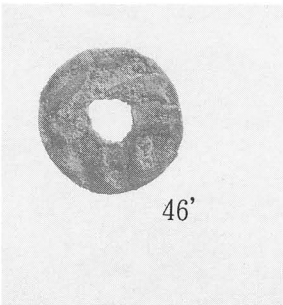
b．7－O地区　井戸1（27～35）

約 1/2

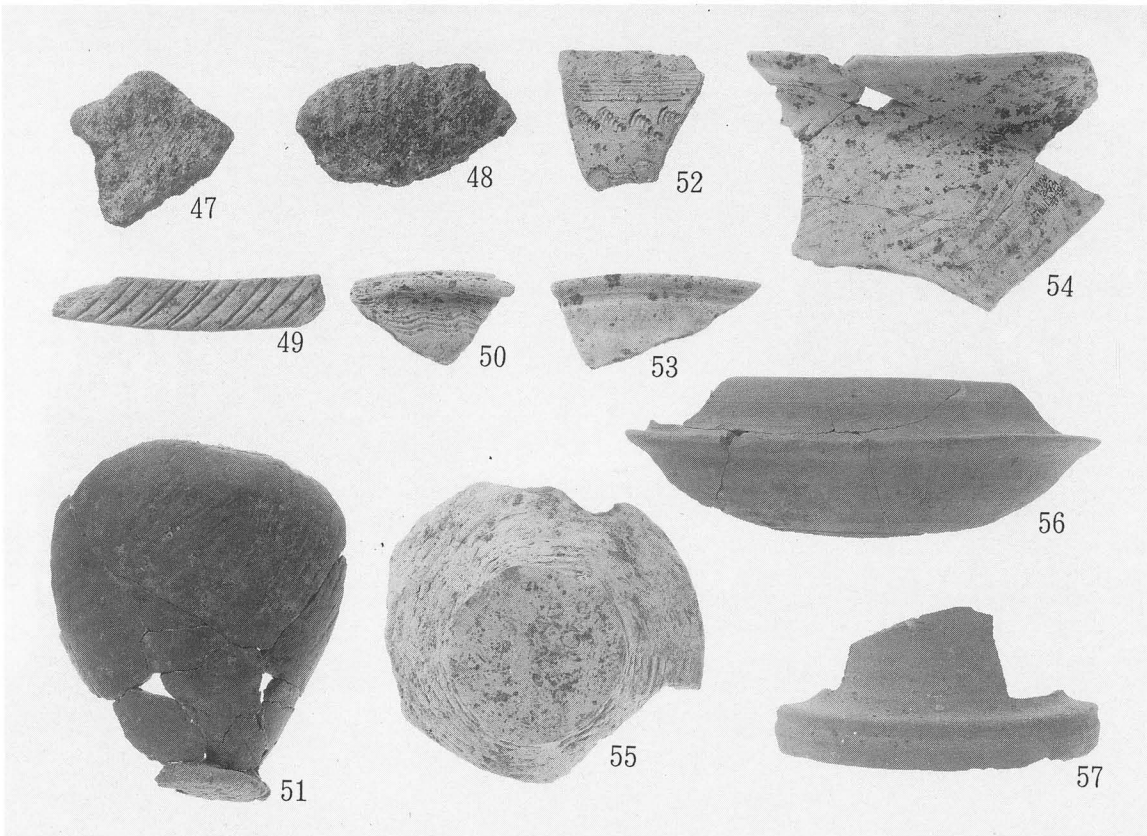








a．7－O地区　井戸1（36～44・46）　約 1/2
井戸2（45）　約 1/1



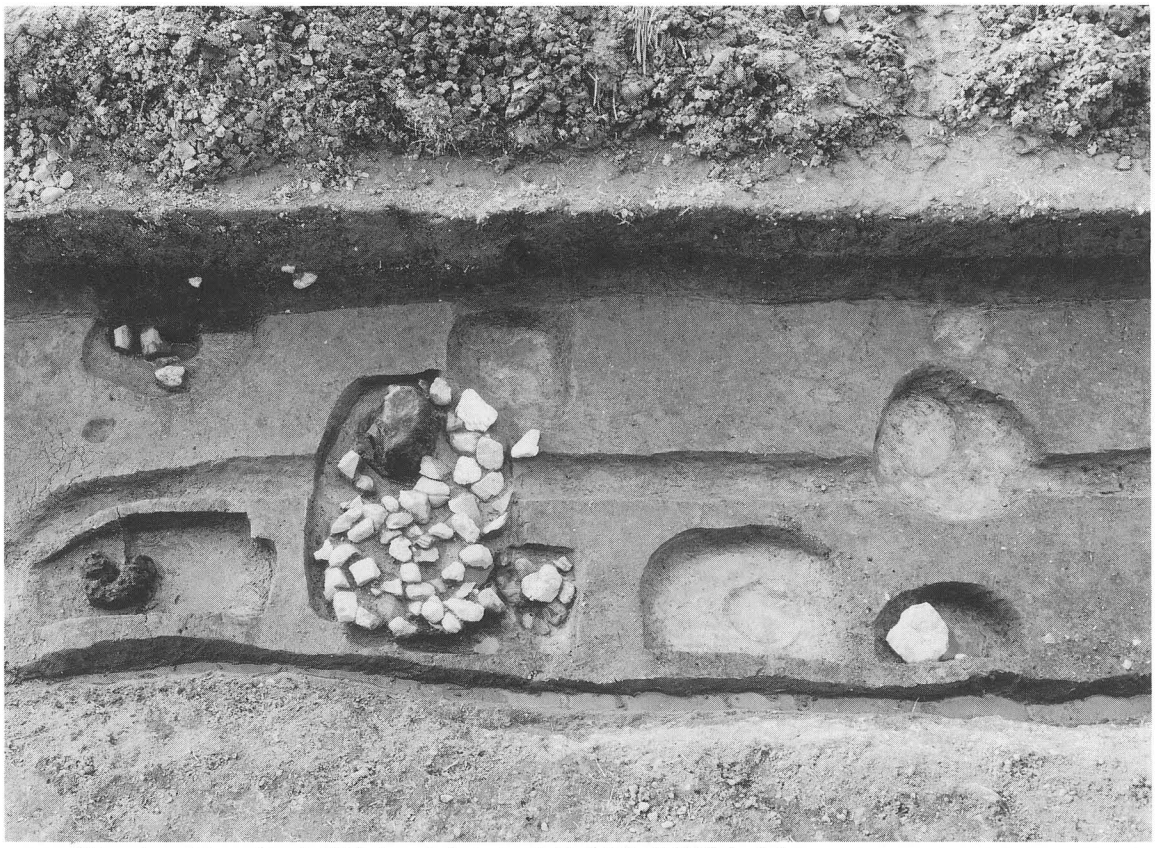
b．7－O地区　落ち込み1（47～53），包含層（54～57）　約 1/2

図版第8

35－A・E・I・M地区　Aトレンチ全景（南側から）

35－A・E・I・M地区　Aトレンチ南半部（北側から）

図版第10

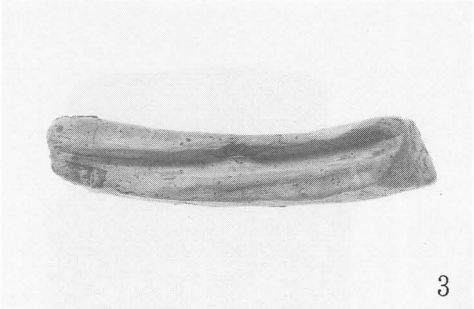


a．35－A・E・I・M地区　Aトレンチ柱穴群（東側から）

b．35－A・E・I・M地区　Aトレンチ瓦溜

35－A・E・I・M地区　瓦溜（1・2・15）

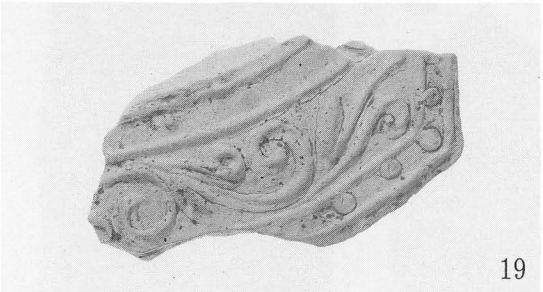
1・2 約 1/2　15 約 1/5

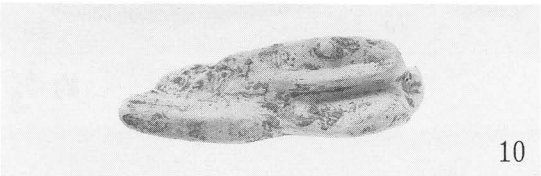


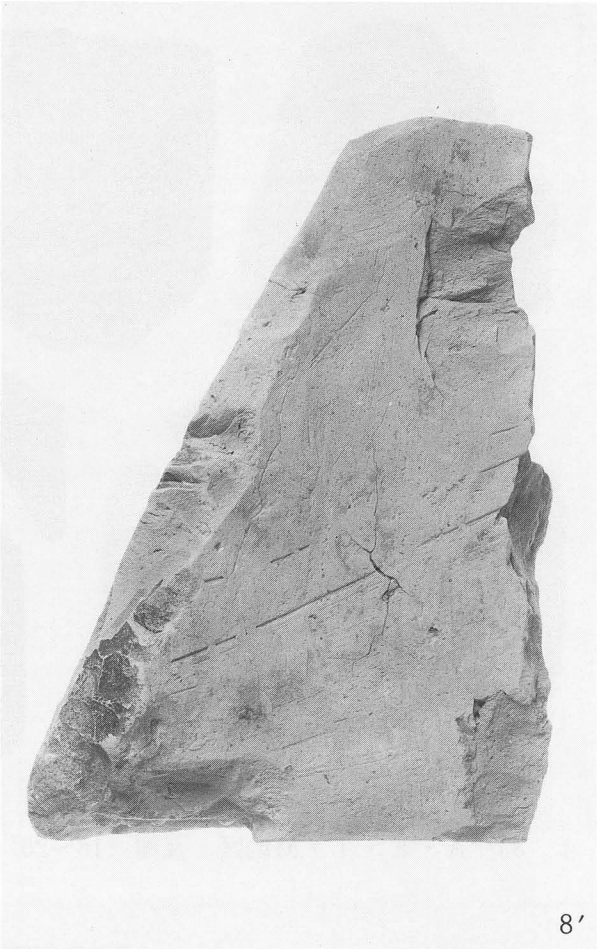
35－A・E・I・M地区　瓦溜（3～7・9）

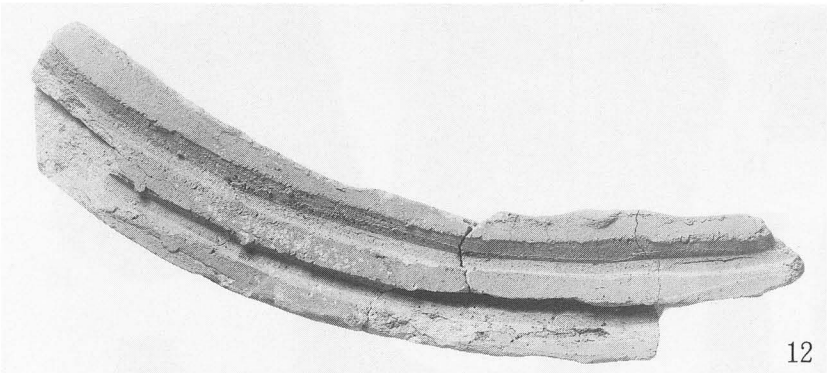
約 1/2

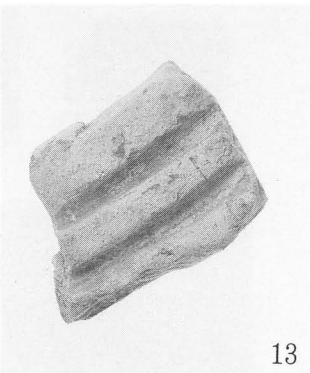
8

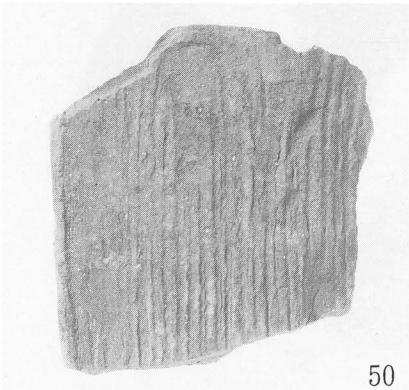

19

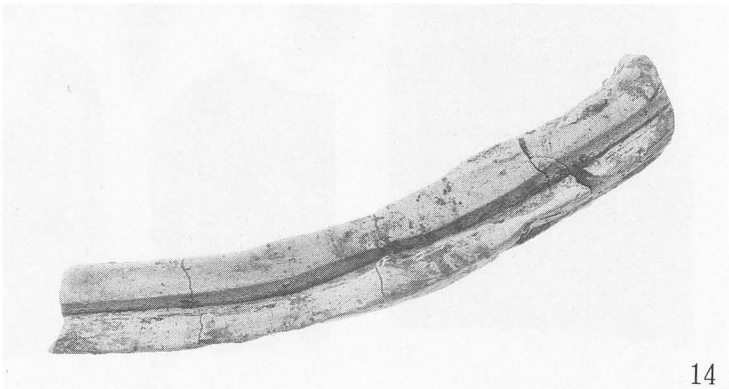

10


8′


12


13

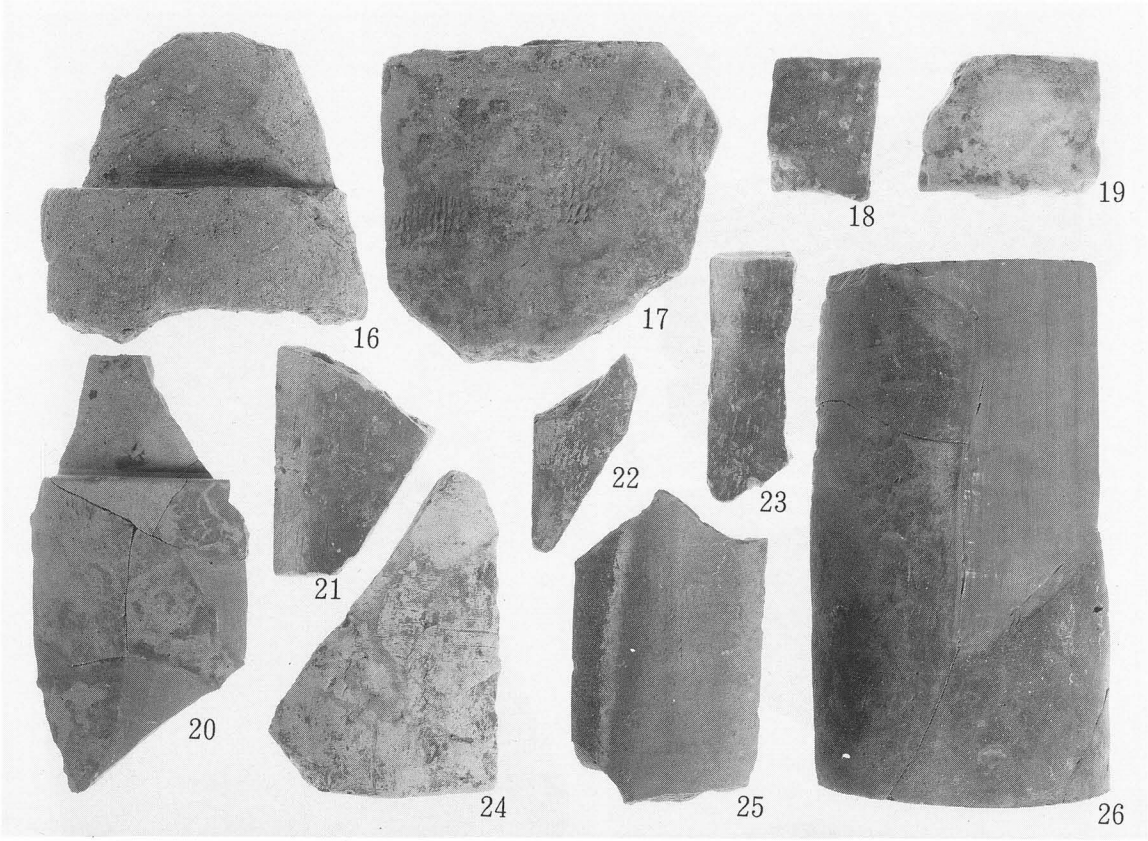

50


14

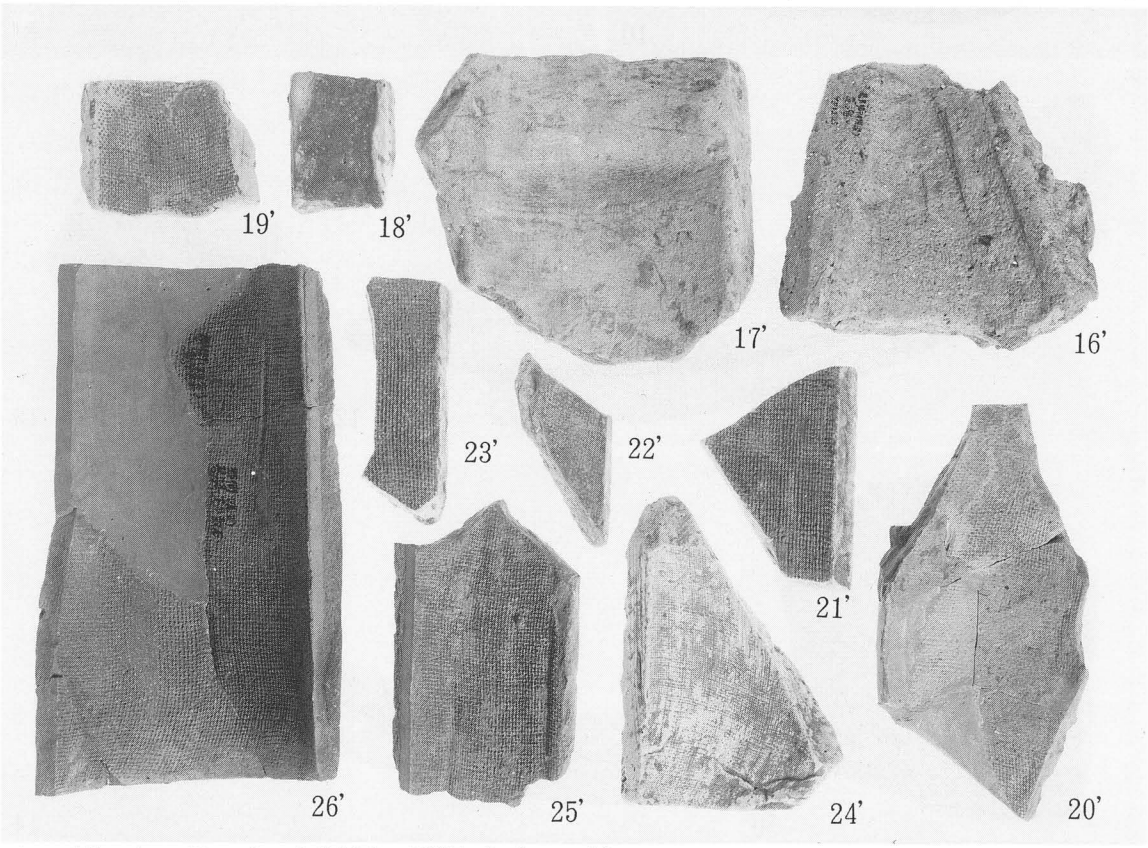
35－A・E・I・M地区　瓦溜（8・10・11）　落ち込み（12）　柱穴3（13）　包含層（14・50）

50 約 1/3　ほか約 1/2

図版第14

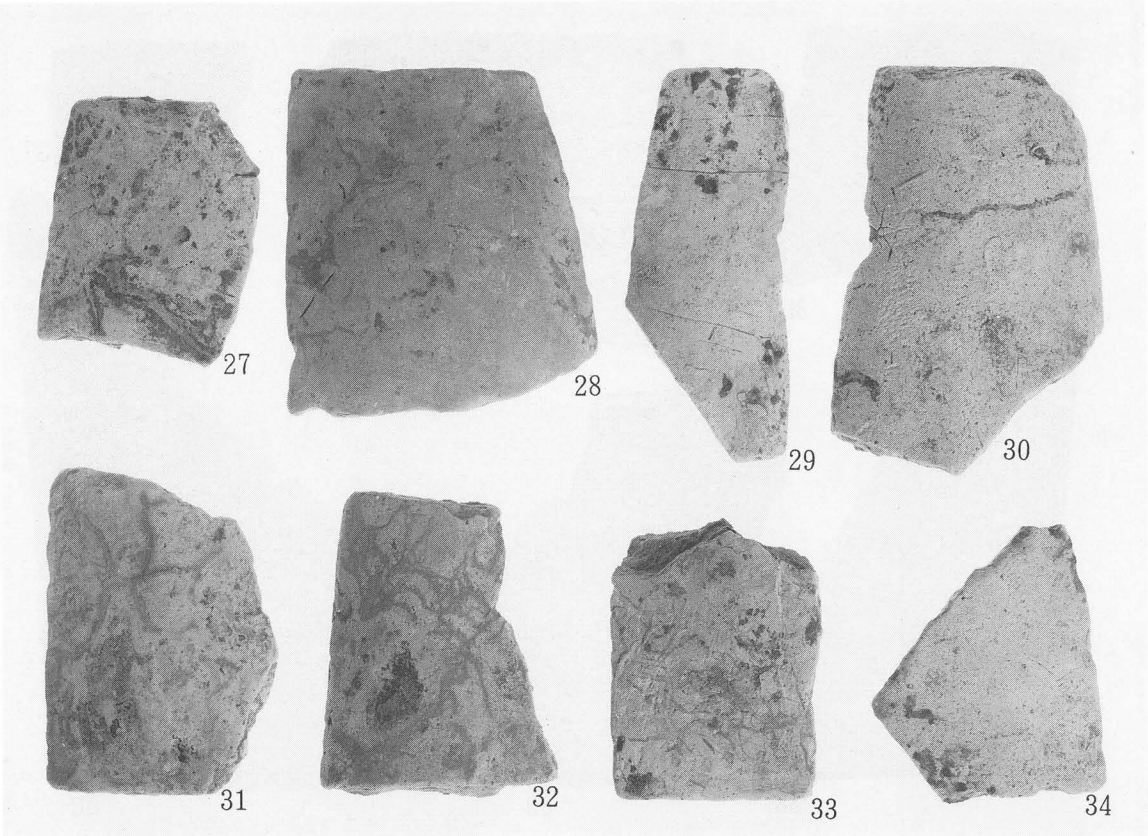


a．35－A・E・I・M地区　瓦溜（16～26）　約 1/3

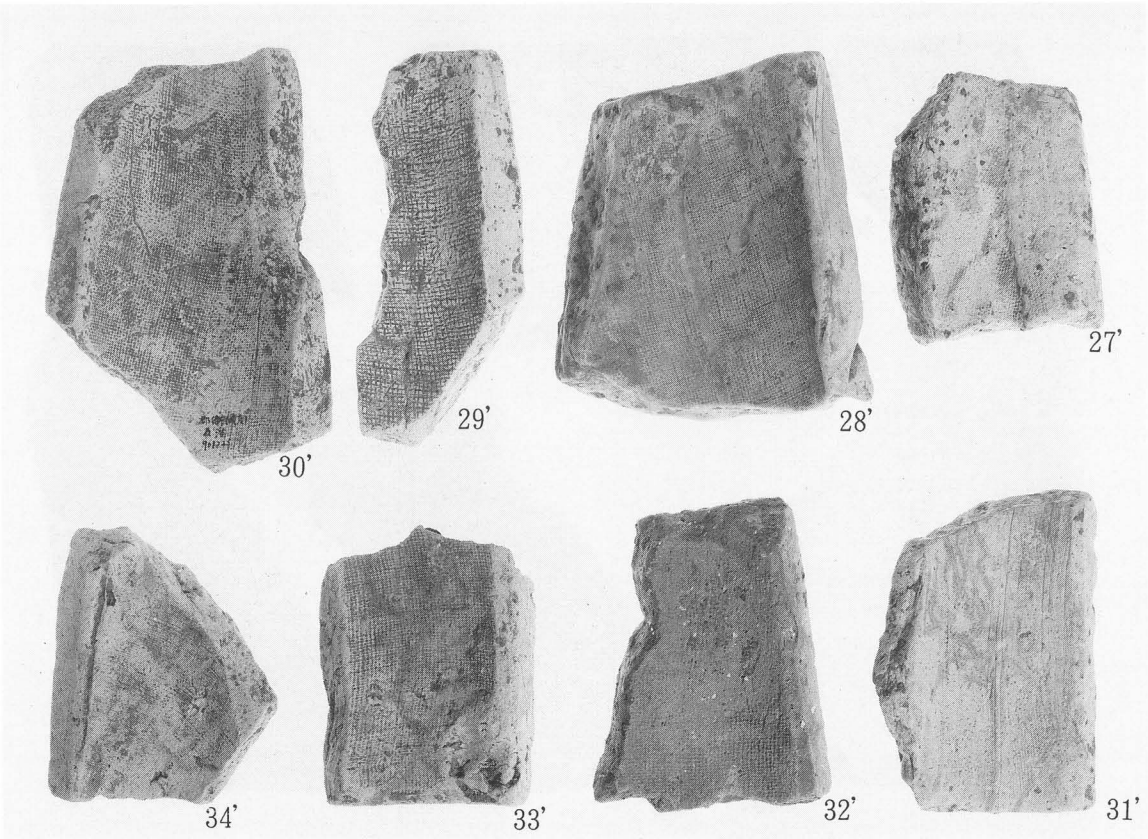


b．35－A・E・I・M地区　瓦溜（16'～26'）　約 1/3

図版第15

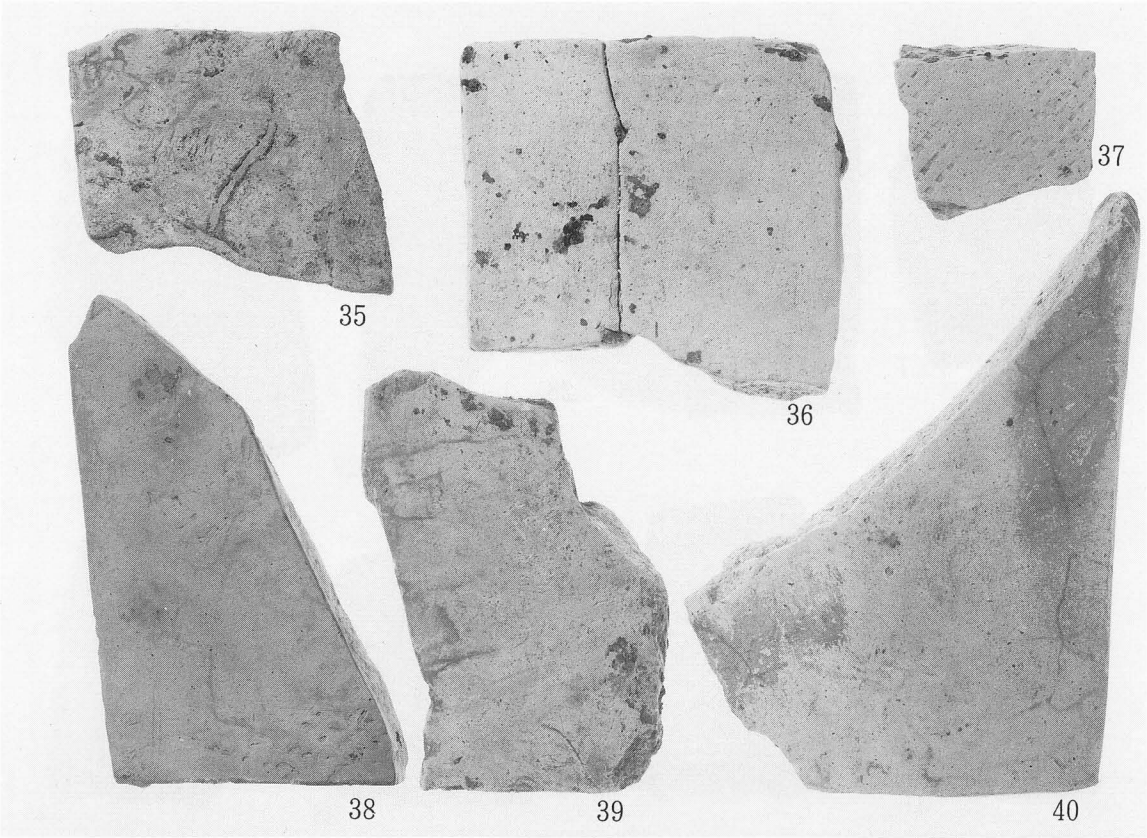


a．35－A・E・I・M地区　瓦溜（27～34）　約 1/3



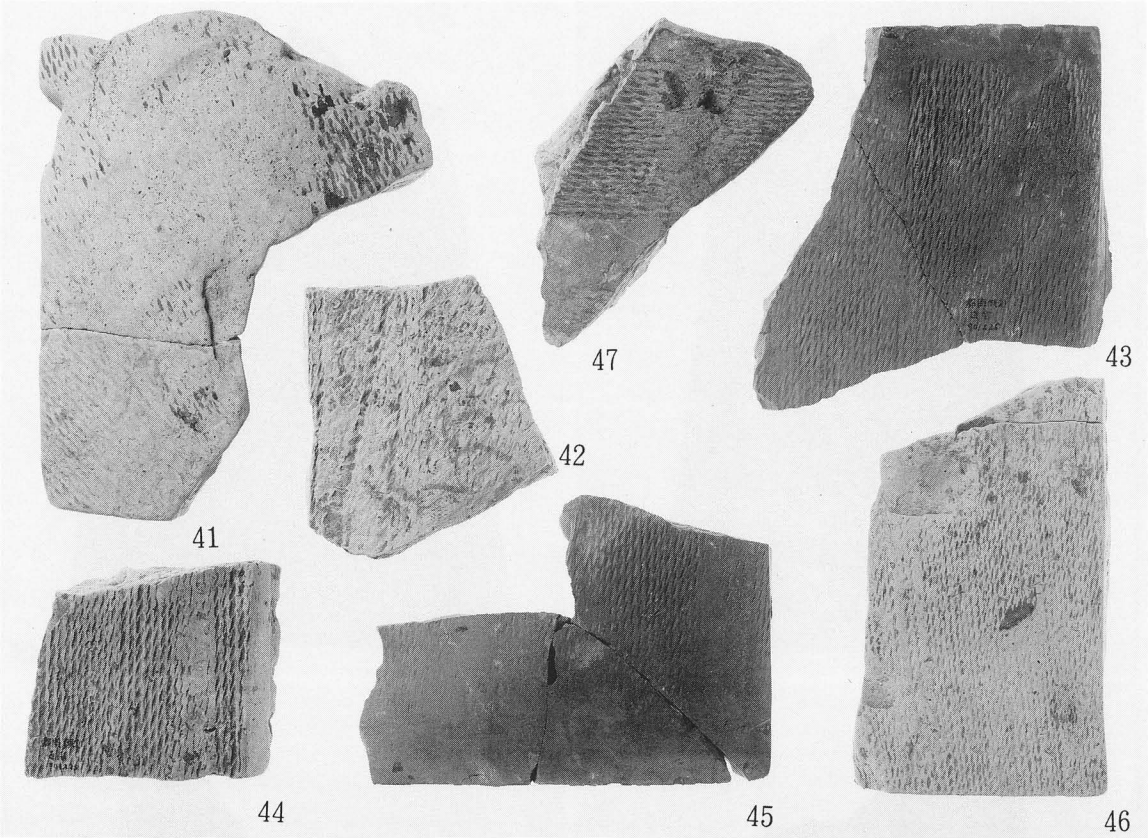
b．35－A・E・I・M地区　瓦溜（27'～34'）　約 1/3

図版第16

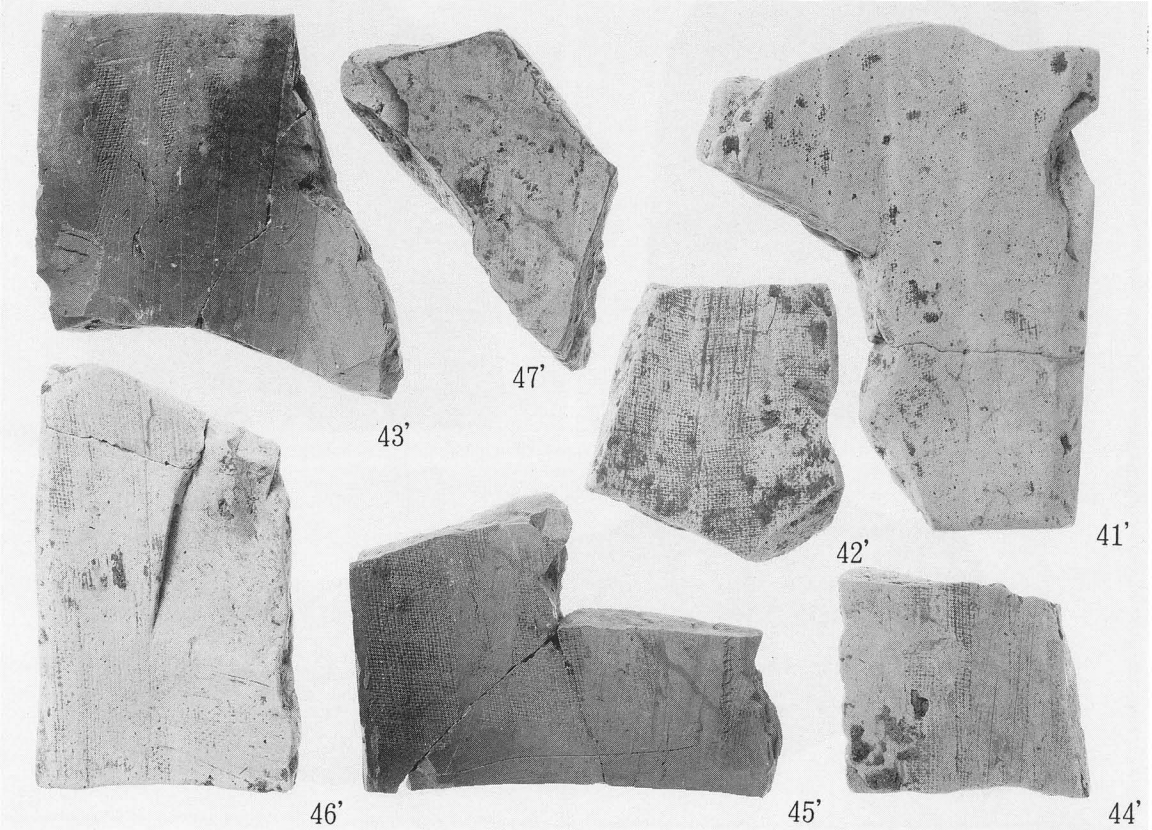


a．35－A・E・I・M地区　瓦溜（35～40）　約 1/3

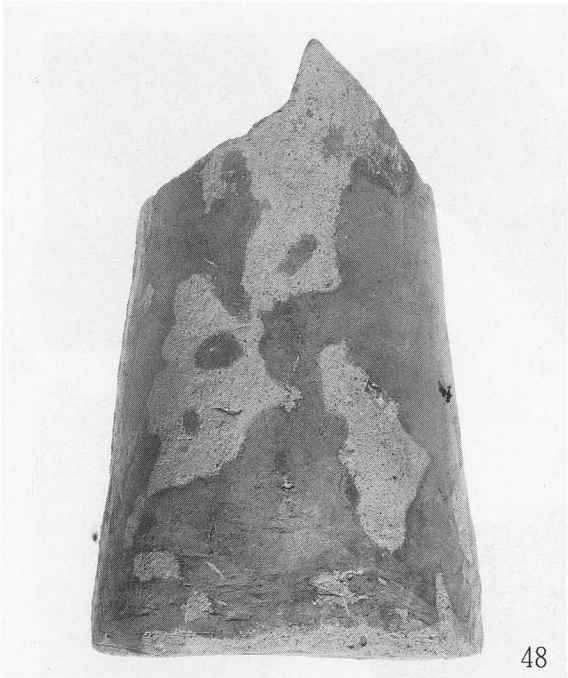
b．35－A・E・I・M地区　瓦溜（35'～40'）　約 1/3



a．35－A・E・I・M地区　瓦溜（41～47）　約 1/3



b．35－A・E・I・M地区　瓦溜（41'～47'）　約 1/3



35－A・E・I・M地区　落ち込み（48・49）　包含層（51）

48・49 約 1/3　51 約 1/2

a．前塚古墳　調査前の状況（北西側から）

b．前塚古墳　第１トレンチ全景（南側から）

a．前塚古墳　盛土の状況（第１トレンチ東セクション）

b．前塚古墳　表土ブロック層（第１トレンチ）

a．前塚古墳　第４トレンチ全景（南側から）

b．前塚古墳　第４トレンチ全景（南東側から）